

十月の文楽座

人形浄瑠璃

名作特興
行輯



文楽座 四ッ橋

竹本津太夫 他全部總出演の
豊竹古靱太夫

名作特輯興行

晴れ渡る秋空に金風そよかに寔に快
き候皆様には彌々御機嫌お麗はしく被
遊慶賀の至りに御座ぬます、借て十月
の文樂座は巨星精鋭揃に新進連をあつ
めたる總出演の名作特輯興行に御座ぬ
ます津太夫綱造節付になる「心中宵庚
申」八百屋内は文樂座初の上演また土
佐太夫の「さくら時雨」は獨自のもの
で二十數年振の想出深き會心の力演で
文樂座に上演記録を残す名作、古靱太
夫の「八陣正清本城」これもまた珍らし
き語りもので熟れも珠玉の名曲で今秋
を賑はすに充分たるもので御座います
若手連の精進も一段素晴らしく更生の
秋この錦繡の美競ふ郷土藝術鑑賞の絶
好期で御座ぬますれば皆様お揃ひにて
お運び下さる様お願ひ申上げます。

昭和七年十月

四ッ様 文樂座

昭和七年十月一日初日

初 日午後二時開幕
二日目より午後三時開幕

・御觀覽料・

- 一等椅子席 御一名 金三圓
- 二等 席 御一名 金一圓五十錢
- 三等 席 御一名 金八十錢
- 一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
專用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴
草履はそのまゝ御入場出來ますか
らなるべく靴、草履でお越しを願
ひます。

本誌へツカへ廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪西區土佐堀通一丁目
長三〇四九番
長四〇九九番
長三〇四九番
長四〇九九番
(44)堀佐土



十月の文樂座 人形淨瑠璃

竹本津太夫
竹本佐太夫
古籾太夫

他精銳總出演

名作特輯興行



二日目の豫定時間表

春

景色櫻のすむてうよ
しの應晴間を見する
さくら時雨

高安月郊作
登澤仙左衛門節付

六條廓揚屋の段 (三時より三時十五分まで)
奥座敷身受の段 (三時十五分より三時五十分まで)
大門口の段 (四時より四時二十分まで)
櫻町住居の段 (四時二十分より五時十分まで)

幕間 十五分間

秋

あはれ千種の詞を
涙ども虫どもわかぬ
八陣守護城

主計之助早打の段 (五時三十五分より五時五十分まで)
正清本城の段 (五時五十分より七時十五分まで)

幕間 二十分間

夏

ごろもきつ、朝れにし
我家さへあごに見すて
心中宵庚申

近松門左衛門原作
食瀧甫北脚色

上田村の段 (七時三十五分より八時二十五分まで)

幕間 十五分間

冬

木立寒い時分の
鳥がよみ振の穂さへ
新版歌祭文

野崎村の段 (九時五十分より十時四十分まで)

幕間 十分間





人形芝居について

- ◇人形芝居發達の事
- ◇文樂座なり立の事
- ◇人形頭説明の事

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれど、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往来』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたま御座います。其當時に、四三と云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出来ない事もありませぬ。其後傀儡子は、門附か辻立て命脈を維いて居たらしく御座いますが、淨土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものでらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。これが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末なむら淨瑠璃さいふものも出來た、即ち京都の目貫屋さ云へるむ西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形さ此三者が綜合される事に成りまし

たのが、慶長年中、即ち徳川の始
頃ですが、忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋
町さか、櫓も立つて此人形芝居が繁
昌しけのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのですが、然し舞臺などは固よ
り無く其人形とて首があるばかり、
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛彈操が、始めて其手足の工夫も
したものですさか、由來此操號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形が出来たり、野呂松のの

ろま人形が出来たり、次郎三郎が
おやま人形を使つたり、殊には彼
の元祿時代になるご大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をはじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸しし、かも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたと云ふのが、始めは此人形を
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之が見好くないから黒幕の蔭に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が袴を着け手摺を離れ無

事がないといふ評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひと全く競争的に繁昌を來した
のですから、従つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美々しく立派やかを盡
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ぬきにするやら、
太夫も出語りをするやら、例へば人
形にしてからが先づ眼が動き、指先
が動き、享保の末には竹本座「大内
鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になると豊竹座「武烈天皇

織』の佐手彦の眉を動かさしはじめる
 など、非常に發達を遂たのでありま
 す。即ち言を換れば當時名人の遺ひ
 手が輩出した次第で、中にも吉田文
 三郎の如きは享保始め竹本座の『國
 性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の出遣
 ひに片手の暗業を示して以來さいふ
 ものは實に此人形について工夫を
 凝らしたもので、其一例を擧ぐれば
 ある『夏祭』の人形に始めて帷子衣裝
 を着せるさか、或は其遣つた一寸女
 房おたつに桔梗の帷子、黒繻子の前
 帶淺黃の綿帽子を着けさせた如き、
 今なほ歌舞伎で真似てる所事實此時
 代さいふものは操盛んを極めて歌
 舞伎はあれど無いも同然、幟は林立

して其眞實は凄まじい有様であつた
 さ云ひます、江戸まで矢張りこれ同じ
 く、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形
 舞し、此人形芝居を始め、以來、各
 派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐた
 のですが、享保に一端大阪の義太夫
 芝居が入つて來てからさ云ふものは
 又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ
 御案内の同様に歌舞伎狂言などは全
 く此人形の眞似のみ演てゐたもので
 あります。前云ふ辰松も三郎兵衛も
 共に江戸へ來て其妙技を揮つた事が
 あるのです。兎も角も此人形芝居の
 全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以
 後になるさ漸次本場大阪でも亦江戸
 の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも
 大した事には成らなかつたと見るべ
 きであります。然し此間に在つても
 人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛
 かり、或は出遣ひたり人も掛かる事、
 其他太夫の引拔早替などのケレン早
 業は愈々進歩を見せたので、而も操
 芝居としては前述の如く、其後は盛
 んならぬ各座の起伏消長が今日に
 至れりさ云ふ次第で、それも今や獨
 り當大阪の文樂座が現存するのみで
 他には語るべきが無いのでありま
 す。さて當文樂座は百餘年の昔淡路
 の人植村文樂軒が大坂高津區に櫓を
 起したのに始まり、一時中絶しまし
 たのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以来發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昭和五年一月四ッ橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座ぎり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます。次第で御座ります。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々々が定まつて居ります。例へばげんひし(檢非違使)と云ふのは、竹本座

の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眠り目なればあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之ですが然し南水漫遊などを見るに別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があること云ひます。兎もあれ昔相巫や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた『日本振

袖始』から出た人形だと申します。それから若男さいふのは源太とも呼んでゐるのか聞きますが持役として『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其肩を引きつめること『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は教盛の役などをするに云ひます。又所謂おやまの中にはおむすこと云つては勿論娘の事で『野崎』のお染、『壺坂』のお里、『妹脊山』のお三輪などを勤めるものあります。南水漫遊に傾城があるのも多分之と同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



高安月郊作
豊澤仙左衛門節付

六條廓揚屋の段

遊人 世之助 竹本鏡太夫
 太鼓持 鶴松 竹本文太夫
 太鼓持 龜三 竹本津の子太夫
 座頭 徳の市 竹本陸路太夫
 小刀鍛冶 金次 竹本播路太夫
 遣手 おりん 竹本貴鳳太夫
 禿 竹本長尾太夫
 豊澤廣助 竹本さの太夫

人形

遊客 世之助 吉田扇太郎
 小刀鍛冶 金次 吉田文作
 かむろ 吉田文枝
 太鼓持 吉田傳之助
 天神 大田ぜい

春

景色画のすむて、
よしの窓障子を
見する

さくら時雨

六條廓揚屋の段
 奥座敷の段
 大門口の段
 櫻町住居の段

高安月郊さんが明治三十九年の春に
 作られて、同年夏豊澤仙左衛門が節
 付をなし、その秋堀江の芝居で竹本
 土佐太夫（當時伊達太夫）が初演し
 たもので今度二十六年振に上演され
 たものであります。京の吉野太夫さ
 は、灰屋三郎兵衛の風雅な戀に本阿彌光
 悦を配し父紹由の禪味を加へ、茶道
 の床しさ人の世の情愛を描した墨繪
 の淡彩にもました氣品ある名作であ

ります。

（床本） 六條廓揚屋の段

踊唄
 結は瀨に住む鳥や木にさま
 る、人は情の下に住む。吉野川には
 住むかよ結が、わしの胸には戀がす
 む。詞エイおけくく踊りも歌も
 面白ない、夫よりはやう吉野を呼べ
 ぞ。客は煙管に上店の、毛氈叩いて
 呼立れば、太鼓共は口々に。マア
 呼立れば、太鼓共は口々に。マア
 何を申すも全盛の太夫様、殊に此頃
 はセキシロ大盡の太夫、灰屋の旦那の張
 合で、もめて有最中、ナニもめて有
 ヤア面白いもめて有るなら猶の事、
 其もめの中へおれが這入る、へいお
 れも雲の上は覗いた事はないが、金
 の山なら、富士の山より高いのぢや

ハ、イヤモ江戸の勝山でも、大阪の利生でも、出口迄送らした男ぢや、京の吉野がどれ程尊い、高貴賣物、金子にあかしておれが買ふのぢや、それ一兩、それ二兩、それ三兩と蒔散す、黄金の色は地に満てど、花は高根の遠霞。詞夫は外の、太夫様なら知ませぬが、吉野様計りは何ん千兩お積になされましても、自由には成りませぬ。先づ座にお付なされませぬ、本願寺さまへ御目見得するやうに、おのづと膝を直します。それれも其答でござります、御容貌は申に及ばず、手蹟はよし和歌、茶の湯、香、花迄お嗜みなされましてお物好きの面白さ、夫に第一お情けが厚うござります。情が厚けりや猶この事、此位思ふて居る此わしに、鳥

渡逢ふてもよいではないか。此正月から通ひ出して、けふで幾日に成ると思ふて居る。九十九日や百日でも千日でも萬日でも、通ふてく通ひ詰める、サア是非共早ふ呼んで来いけふはどこへ來てゐるな、おれが直に呼に行くこ、立上れば。マアくお待なされませぬ、止るも聞ず振拂ひ、門にすへたる搦白に、立し燭臺突倒し、暖簾かき分入る世之助、扱もきつい氣短さ笑ふ座頭に天神も、聲を合せて居たりける。是も又、花を尋ぬるうかれをか、伊達の薄着の夫ならで、かなげじみたる古布子、うそ汚れたる手足にて、誰に逢はんご迷ふかや、遣手のりんば袖拂ひ、エイ此人は何じやいな、傍へ寄つて下さんすなと、云へば男はもちく

こ、ハイイヤ鳥渡お尋ね申ます、吉野太夫はごに居りますな、何じや吉野様。夫は何ぞ御用かぬと、問へばいよく口籠りて、ハイ鳥渡逢はして下されと差俯けば顔詠め、ごの田舎の人やらしらぬが吉野様ご名ざしをするからには、ちつこは噺に聞て居さうな物、山程お金を出す大盡が、一月も二月も前から口をかけたも、中々達れぬ御全盛に、逆立ちしても一兩ご出さうもない体で、逢ひたいさばよう云へた、太夫様所か此里でお前方の相手になるやうな者はマないわいなさ瓜はじきしてゆきか、れば。ア、コレ待た金なら爰に五十兩と。内懐より取出し。まだ足らぬかは知りませぬが、私にしては五十三日、五十三本打つて打つて

奥座敷身受の段

セキシロ大盡
實は 此江應山

豊竹つばめ太夫

天 神

竹本浪花太夫

灰屋 三郎兵衛

竹本相生太夫

よしの 太夫

竹本南部太夫
竹本小春太夫

花 車

豊竹呂太夫

本阿彌 光悦

竹本文字太夫

豊澤 仙糸
野澤 吉彌

人形

此江 應山

桐竹紋十郎

吉野 太夫

吉田文五郎

かむろ

吉田文枝

花 車

吉田玉七

灰屋 三郎兵衛

吉田榮三

本阿彌 光悦

吉田玉松

夜の目も寝ずに打上ました、汗に涙のまじつた金、さいふにこなたも立戻り。是はマアきつい執心、一たい

兩で、逢るやうな太夫じやない、そこを何ぞぞ、エ、マア生れ變つてござんせと、つき倒し入る所へ、内より禿は走り出、申しその人、太夫様がお聞なされお目にかゝるご云はしやんすご、云へば驚く遣手より、

ごこの人じやえご間ばいよく打しほれ、私は七條通りの駿河守金綱といふ小刀鍛冶の弟子金次と申者、此正月の屠蘇機嫌に、友達に引ばられ素見に來たのが迷ひの元、叶はぬこさい、幾度か、自身で自身に意見をしても、諦られぬ太夫の姿、いかに身分は賤うても、金さへ有ば逢れうと、必死に成て働きました、わたしにしては精一ばい、夫で足らずば此兩腕、うつより外はござりませぬご戀も迷も程過て涙涙りたる物語り。遣手は猶も心強く、チ、さうじや其体を打上げて、大金持か上ツ方に、仕かへるが何よりじや、五十兩や百

金次は夢か今更に、物も云はれすうちふるふ、寒さ身にしも春かぜに、さそはれてこそ入りにけれ。
(床本) 奥座敷の段

奥はつらなる燈火の、花照りかへす銀襖、殊に今宵はセキシロご、假名に碎けし大盡の、雲の上より下向とて、二重床には三幅の、狩野の山水仙人も、酔ふや下界の春の香に、花は殊更朝鮮の、松の位もふさはしき棚に蒔繪の硯箱、蟹の盃取分けて

獨り動きて前に行く。應山暫し打歌
め、左の手に蟹盃を持ち、右の手に
酒盃を持ち酒船の中に拍盤せば、即
ち一生を樂しむに足るそ有、古人の
詞一ツにして、蟹の盃おのづから
手を勞せずして座をめぐる。太夫の
趣向の面白さ、琉球製か廣東の、帶
もふすまも敷奇凝らす、君の姿に風
流は、暫し見ぬまにいかならん。兔
角花には急がれてと、酒も過ごさず
待居たり。吉野とは花の姿をたこへ
けん、山は及ばぬ月影の、水にした
いる情には、戀の歌さへ反古染に、
疋田絞りの數々は、何の思ひを打か
けの、裾もあそ引夕霞、對の禿に香
盆と、香の包に面影を、かへす幾代
の伽羅の香や、夢も常世の風情也。
おめづらしうござんすなアと、一目

花洩る春の星。應山も打笑みて、そ
りや其筈で有まいか、毎夜籠へ通ふ
ても、よその霞も隔るゆゑ。何ほ霞
は隔ても、お心一ツで晴やうに。
心の月も光りなく、曇るは何の爲ぢ
ややら。花もおぼるの春の宵、暗れ
ぬが浮世でござんすなあ。イヤけふ
は顔を見て日本晴、曇らぬ内が一刻
千金、花に花添趣向あり、用意よく
げ早是へと、呼ば襖を打開き、花を
つられし天神の、花の秋に花の桶、
先づ北野より咲そめて、四方に香も
飛梅と、續く盛りは桃山の、城は落
ても三千代草、八千代變らぬ椿寺、
夫れも五ツに咲別れ、影も寫して鏡
草、井手の里まで君が爲、一ト枝は
君の名に譲り、わざとほぶきし花園
や、嘸櫻我は廓の菜種さへと、いつ

ぞや君の述懐を、けふは聊か慰ん
ご、名所の花を集めたのじや、どう
じや少しはこれで齎たかご、さす
盃ににつごご笑み、一ツ過ごせば
應山も、蟹より手づから返盃と、促
す向ふに聲高く。イヤ待つた、其
盃わしにさして貰ひましょと、枝
垂櫻の花車、先に灰屋三郎兵衛、町
人ながら堂上に入出舊家の育ちとて
禮も風雅も知る身さへ、せくは戀路
の花争ひ、末社引連座に通り。花を
色々集めても、花の君の櫻をばぶき
何でそれが花園じや。是こそ大和の
よしのの、はなまの、やまぐら
吉野から取よせた山櫻。セキシロで
も節季候でも、此里には上下はない
金であらばす心の深さ、何と太夫ど
ちらの花が氣に入つたご、金ご位の
色くらべ、あはれ吉野が盃をさす

はいづれと目をそくげば。ア、イヤ
 其盃そのさかづきわしにさして貰もらひましょと、
 又も入ま入い来る異ひやうの老人ろうじん、こは本阿
 彌あま驚おどろ應おう山さん、三郎兵衛ざうべんも赤面せあめんの、
 仔細しさい知られば花車くわしやは押止おしどめ。エ、マ
 ア此人このひとは氣狂ききやうひか、と、云へば笑わらふ
 て懐ふところより財布さいふ其儘そのま投なげ出し、いや氣
 狂あかひでも何なんでもない餘あまり噲うはが高い故ゆゑ
 どんな女おんなで有あるか、只ただ顔かほを見みに來
 たのぢや、金かねが入いるも聞きた故ゆゑ、ついに
 持もたぬ財布さいふ持もつて來きた、是これで見みせ
 てもよからうと。つかく、と傍そばによ
 り、成程なるほど是これはマア美うつくしいと、云い顔かほ一
 目め、吉野よしのは見て取とり。一ッお上ありな
 されませと、差さ盃さかづきに皆みな憚はなり其その盃さかづき
 を此このお方かたに、サお見請みうけ申まをせばお位くらも
 お金かねもなければ色氣いろけもない、何なんの思おも
 ひもないお顔かほで、御覽ごらんなさるか誠まことの

譯わけ知り、何なんさうではござんせぬか
 と、云いに流石さすがの光悅くわいつも成程なるほどこなたは
 マ利發りはつじやな、是これでは人ひとが迷まよふはづ
 と、ほゞみ吞のみほせば、私わたしにお返かへし
 下くだされませ、お流ながれ請うけて心こゝろの塵ちりを、
 洗あらふて見たみたふござります、ア、イヤ
 くこなたに返かへせば毒どくに成なる、さて
 もの事ことに持もつて行いかうか。花車くわしやは彌あま々々
 呆あはれ顔かほ、エイ此人このひとは怒おこりの深ふかい、其その
 盃さかづきは廓くわくの名物なぶつ、持もつて行いかれてた
 まる物ものかいな、イヤ盃さかづきばかりか名な
 物ぶつの太夫たゆうも持もつて行いたいと、云いにた
 まらず三郎兵衛ざうべん、せきにせいいたる顔かほ
 色いろにて、櫻うづの根元ねもとにひそめたる金箱かねば
 取とつてソレ千兩せんりやう、太夫たゆうはわしが連だれ
 て行いく、けふから吉野よしのはわしの物もの、誰だれ
 で有あるか彼かれで有あるか、指さしでもさゝせ
 る事ことでない、サア太夫たゆう用意よういしや、も

ふ片時かたときも爰こゝには置おけ、直ちかに是これから連つ
 て行いき、手てを取りてうながせば、光くわ
 悅いつは笑わら止どまり。連つて行いく、さほそりや
 どこへ。サア取とり取とりへす下屋敷しもやしへ。其その
 下屋敷しもやしはこなたの物ものか、取とり出す書かき
 付つ一通いつう、三郎兵衛ざうべんは一目め見て、何なん勘かん
 當あたる事こと、サアどうじや夫つまでも身請みうけを
 するかな、實じつは今親御いまおやの所ところへ何氣なんきな
 く往いつた所ところ、常つねならぬ顔かほの色いろ、どうな
 されたと聞きて見みれば、兼かねて悴せがれ六條むじやう
 通とひ、しかも代々だいていお出入でいりする、此江このえ
 様さまと張合はりあふさは、申し譯わけもない不始ふし
 末すえ、勘當かんたうするに云いはれる故ゆゑ、マアお
 待まちなされ、夫つまでは私わたしが廓くわくへ行いく、どん
 な様子ようすじや見たみた上うへで、意見いけんも出來できれ
 ばして見様みさまさ、勘當かんたう状じやうはあづかつて
 來きて見みれば此始末このしまつ。こりや迷まよみだけ
 迷まよふもよからう、慥たしかに狀じやうは渡わたします

大門口の段

竹本鍛太夫
豊澤新左衛門

人形

門番	與右衛門	桐竹門	造
座頭	徳の市	吉田玉	徳
遊客	百 姓	吉田傳之助	
遊客	武 士	吉田玉	市
小刀鍛冶	金次	吉田文	作
三郎兵衛父紹由		吉田玉次郎	
此 江 應 山	桐竹紋十郎		
遊客	世之助	吉田扇太郎	

さ、云はれて流石三郎兵衛此場の手
前人の思はく、金に心は残られど、
其身ばかりか太夫迄、翌日から何ぞ
成うがさ、世の初風に糸樓、俱にし
ほれて詞なし。吉野は傍に摺寄て、
何を思案しやしやんす、今迄はお前
も大盡花もこがねに咲かせては、見
得張合が先になり、戀もなさけも、
ごこやりに浮いた所が見えたぞえ、
今こそ着のみ着のまゝの、其身ひそ
つさならんして、残るはほんの心だ
け、その心こそ何よりも、深いなさ
けの泉ぞや、私もなまじさやかくさ
はやされるだけ名にこがれ、顔にお
ぼれしうかれたの、あだな情に飽き
はて、いつもさびしい胸の底、今河
竹の身をぬけて、よしや山家のわび
すまぬ、其日ぐらしになるさても、

かざらぬ色に真心を互に見せつ、見
るならば生きてかひある浮世ぞや氣
を上げまして下んせと花の襦脱捨
て、残す揚屋のおき土産、變る姿に
持物も、春の筐さ分け興ふ。かゝる
爲さて持ざりし、服紗包を應山は、
懐より、取出し。世の中よ道こそ
なけれ思ひ入る、山の中にも鹿ぞ鳴
くなる。山の奥さ有るべきを、山の
中さ書誤り、夫れが却て名物さ、世
に持てはやされし小倉の色紙、これ
を此場の饑別と、渡せば取て押いた
いき。ほんに是から思ひ入る、山の
中に鳴く鹿の、聲を枕の詫住居。譬
へ何さなりまして、是は屹度離し
ませぬ、何の夫に及ばうぞ、せめて
心の一端を、請けてたもれば満足さ
残り惜しさを夫ぞさは、云はぬ應山

光悦も、哀れ覺ゆる春風に、咲く間短き山櫻。落て流るゝ谷川の、末はいつくの塵となる、薰り残して出て行。

(床本) 大門口之段

既に其夜も更行きて、内も静まる騒ぎ歌。辻の行燈もやゝ眠る、茶屋の編笠ニツ三ツ、四ツと残るか大小に客の吟味も門番の、與右衛門は酒機嫌、店の床几にこげかれば、三味線脊に徳市が、歸る足音聞告め。コリヤ待て。へいゝゝごなたでござりますすな。さう云ふ貴様は何者じや。チゝ與右衛門様じやないか、よい機嫌じやな。フン徳市か、イヤお前でも只は通さぬ、吉野の山でも諷ふて行け。エゝ夫ればもうせんご諷ふて

來ました御免くゝ急ぎ行く。續いて來るは編笠に、顔に隠せど武家ぞさは、羽織袴と後に附く、髭も造りし奴まで、酒もなごりもまた残る、あゆみものうき千鳥足。與右衛門もちろく眼。エイ又うせたのは何者じや。さう云僂は何者じや。諷抑々これは元祖與右衛門九代の後胤代々門番與右衛門なり。エイこいつ知盛と出おつたな、よしそんなら此方も辨慶で請けてくりよ。諷打物業にて叶ふまじと、草履さらく押もんで、東方高尾太夫、西方夕霧太夫、中央吉野太夫の襦にかけて祈られ、門番次第に遠ざかれば、奴は旦那に力を合せ、預けし大小取て渡せば、猶天神はしたひ來て、おさらばえ、さらばくさいふ沙に後白浪こそなり

にける。鐘も消行夜半の風、夢は覺めても夢たどる、金次は思ふ一端さ逢ふて盃酌かけし、夫れにて思ひ切よさは、慈悲か無慈悲かしみく、異見に又さ云はれもせず、さりとて思ひ切られぬは、所詮命にからみつく、君の一目をさらば垣、我も暇の柳かこ、茶屋の硯に一筆を、残すこなたに是は又我なられども子の迷ひ、親の紹由は兎や角と、切つて切られぬ恩愛の、道は一筋品變る、三筋町さばあなにかと、覗く向ふにはやり歌。唄吉野の山を雪かみ見れば、雪にはあらで花の吹雪よ、詞あの歌は三筋町、文句も同じ吉野さは折も折さて氣にかゝる、雪か花か花吹雪、所詮散られば成らぬかなア、唄君故ならば雪の野に寝まし、よし

や此身は消ることも、恨み歎きも今は
早、名残り斗りと振り返り、また金次
は燈火の、薄き方へさあこがれて、
足はそら行後に落つ文を細由は取上
ぐれば、吉野様へ、ナニく先程は
思ひがけなくお盃下され、細々
の御異見、嬉しく又悲しく存候。所
詮ながら候は、無用の煩惱暗れ申
すまじく、今の御姿の目に付候中、
桂川へ身を捨申候、決してくお恨
も何も是なく、只哀れと思召し下さ
れ候は、心よく相果申へく候。ア、
コリヤ死ぬ人が有そやうな、ア、恐ろ
しやく夫程迄に迷はず女子、さて
も思ひ切まいな、併し思ひ切ぬ斗り
か、若しやこんな身の果に、あれも
成りはせまいかなア、思ひ切れそ
は身のまゝか、誰かは切らん戀の道

登り詰たる世之介は、春の行衛に氣
も亂れ、あたりきよるく尋ねくる
細由は夫れと氣も付す。モシ一寸お
尋ね申ます、吉野太夫は、どこに揚
られて居りますな。ナニ吉野、チ、
吉野、吉野ならサアござれ、わしと
一緒に行ませうと、手を取て行か、
れば、エ、是は何をなされます。イ
ヤ何もせぬサアござれ、私が是から
身請する。エイ何を云つしやるのじ
や。何を云はふぞ太夫の事、吉野よ
り外に云ふ事はエ、いまアないわいな
ア。エ、こりや氣が違ふたさうな。
チ、氣も違ふ死にもせう、いつそ其
男を殺してやらうか。エイめつそふ
な、そんな事を云はずに、内へお歸
りなさりませ、親御があんじてござ
りましょ。アハ、ハ、イヤ私に親は

ござらぬわい。親がないさばア、お
氣の毒な。親がない故勘當もされぬ
のじや。エイ。親より子より吉野一
人、最一度顔なと見たいなさ、又も
入行其姿、丁度我子の年恰好。これ
は氣狂ひ、あれは身投げ、悴ば何に
成らうやら。破れ菅笠しめ緒がきれ
て、更に着もせず捨もせず。あはれ
我子か手を引て、女連行廳夜や、扱
はゑにしも是迄と、見送る後、應山
世之介、戀も哀れも恩愛も、俱にお
ぼろと三重成にけり。

(床本) 櫻町佗住居の段

音羽川、世に流れては秋さ鳴る、風
も身にしむ櫻町、落る木の葉に夢覺
めて、窓の月見るきのふけふ、晝は
身過と土ひねり、妻は扇の地紙折、

櫻町佗住居の段

竹本 土佐大夫
野澤 吉兵衛
琴 竹澤團二郎

人形

女房	おさく	吉田	文五郎
灰屋	三郎兵衛	吉田	榮三
傀儡師		桐竹	紋太郎
番頭	五兵衛	吉田	光之助
父	紹由	吉田	玉次郎
侍	源吾	吉田	玉幸
本阿彌	光悦	吉田	玉松

手わざはかなき暮しなり、門へ來かゝる傀儡師、唄哀れ成かな對王丸、安壽姫のほらからは山椒大夫の家を出で、別れの辻まで來たりしが、山へ行くかよ弟よ、濱へござるか姉上よ、頓で歸らせ給へや、さらばくくと立別る。詞ア久々で傀儡師文句も丁度山椒大夫。イヤコレおさく何なさやつてやりや。アイさお徳は立上り、あたり見れども一ひらの金氣盡きたる瘦世帯、簪拔て與ふれば。チ、太夫様では御ざりませぬか。エ、御存じて御さんすか。エ、知つて居る段では御ざりませぬ、二三度も御座敷へ呼ばれまして、お目にかけた事も御ざります。ム、ム、い、扱は是が只今のさあたり見廻し興覺顔マア、變つたお住居で御ざります

な。サア住居も變れば氣も變り、結局氣樂で御さんすはいな。ム、い、お氣樂と云へばやはは又お氣樂な、私も氣樂な人形まはし、時々お伺ひ致しましよ、併これは結構な品、こんな物を戴きましては濟みませぬ、アノ十文でも二十文でも、其方がよろしう御ざります。サア其十文もない程に、夫など持て行て下さんせ。エ、アノ十文も、イヤなうて私には仕合で御ざりますア、ハ、い、それでは頂戴致します、併以前の事を思ひますよ、安壽の姫よりお變り様が、ア、コリヤお客様より、人形遣ひの方が悲しうなつてまいりましたよ、涙拂ふて歸り行。三郎兵衛は苦笑ひ。イヤモ兎角知つて居る者が多ふて困るのう、是では山の中へでも這入た

方がまし、然し夫では又職がなくなる、こんなはかない土なぶりでも、ごふか斯か暮されるのに、山の中では落葉を着て、木の質でも捨ばにや成まい。サイナア、寒山と山姥の二人ぐらしは誰の畫にも御ざんせぬ。ほんにそふじやのふアハ、チホいこ、打笑ふ。聲も淋しき詫住居番頭五兵衛は今も猶、主の思ひのまめやかに、元の姿になをさんご、人にも云はずけふも又、様子いかに尋ね来て、ヤ御免なされませ、チコリヤたいそふ御精が出ますな。チー五兵衛か、精を出されば口が干上るイヤ若旦那にも大分汐か染みましたな。サア潮が染んでも浮び上らぬわいの浮世の波はア、荒い物じやないふに爰ぞご五兵衛は摺寄。其荒波

も御本家の、大船へお歸りなされませ御量見は御ござりませぬか。サアない事はなけれ共、勘當さいふ二字には、寄付事も出来ぬでないか。サアいそこで御ざります、其御勘當もお心次第で、ゆりまい物でも御ざりませぬがご、後はお徳に憚る躰、夫と察して女房は、ドレお茶一ツ入ませうご、勝手へこそは入りにけれ。後見送りて小聲に成り。申々アノ太夫で御ざります、モ不粹な事を云ふやうで御ざりますが、何を申も太夫から、斯云事になりました故、そばにお置なされましては、いつまでも果しが御ざりませぬ、何ほ御苦勞なされましても、何をしほにゆりませう。大旦那の思し召は伺ひませぬが、太夫さへおいなしなされました

ら、夫が第一御改心の證據、夫をもごに御親類中から、お口添へなされましたら、つい埒の明く事ぞ存じます。ア、コレ五兵衛、お前は貧乏人の内に生れて、其年迄灰屋の番頭、まだ金を遣ふた事がない故、金の直打を知らぬな、ごうじや、三日程大金にしてやらふか、私は少し斗り金を遣ふたが、今から思ふごありや金が遊んだのじや、追従も輕薄も、皆金に仕て居たので、私の心は有頂天ごこへやら飛で居た、所むかれがなく成たので、驚いわてれに歸り、人の心も世の味も、腸に染み込んだ成程本家には金は有、併し本家に居る中は、遊女通ひをせぬ迄も、魂は抜けて居る、おさないう仕た所で金の番人、今では一文もない暮しじ

やが、此あばら屋にも心は有、魂
 がすわつては、宮もわら家も同じ事
 薄茶の泡は飲む味は、こりや今迄知
 らなんだと心明せど五兵衛は解しか
 れ。イヤ申賃惜みをおつしやります
 な、何じや眞惜みじや、ハ、ハ、ハ、イ
 ヤ分らぬ奴じやな、マア、一服飲
 してやらふと、茶碗二ツ取出し、コ
 レこれを見い、こちらはさるお屋敷
 から、底をつげいとおこされたが、
 聞けば加藤清正が朝鮮土産、太閤へ
 献上したといふ、利休の銘もある茶
 碗、それでは千金でも得難からふ、
 しかしこふひごふ損じては、國も時
 代も違ふた土でつくるふても風情が
 ない、コレ此方はわしが是を見て、
 其風韻を呑み込みこしらへた物、丁
 度は是が前々今の私の身の上、内に居

る時分は、金は有ても利休の茶碗じ
 や、名器と云斗りて、コレ此通り底
 がない、茶所か水も飲まれぬ、今で
 は粗末な樂焼じやが、底も有、味も
 あると云へどいよく呑みます。テ
 モ千兩の茶碗で飲だら、一しほ味が
 ようござりましょ。何じや味がよい
 イヤとこ迄も分らぬやつじやな。わ
 からぬのは、あなたでござります。
 エ、お前が分らぬのぢや、いいえあ
 なたも分りません、何お前が。い、
 えあなたが。いやお前ももう好い加
 減に目をおさしなされませ。何目
 をさませ。三郎兵衛はむつとしてき
 せる取るより利休の茶碗、たゝきわ
 れば五兵衛は仰天。夫はマア、何
 をなされます、千兩の代物をと、呆
 れる体に高笑ひ。ワ、ハ、ハ、ハ、サ斯割

た所は遊女通ひに身代を潰した所、
 大家でも名器でも、割うと思や、た
 つた一と打、是で金の價はなくなつ
 た、何は是を繼ぎ足しても、元のや
 うに逆も成らぬ、夫より別にかうし
 たら、風韻も有満足な、始めてうま
 い茶が飲める、サア一服飲で見い
 云へど此方は尙迷惑。イヤモウ、
 結構でござります、又お伺ひ致しま
 せよ。いや、茶が飲めぬやうなもの
 はくるには及ばぬ。ヤ是は恐れ入ま
 す、とこそ、こゝに立ち出て、又詮方も
 投首の思案盡てを歸り行、お徳は始
 終洩れ聞て、男の心今更に、嬉しく
 つらき我身の上、行くにゆかれずと
 どまりて、いよよ薄らぐ夕日影、情
 のみにて送られぬ世の冬枯を何させ
 んと、三郎兵衛の傍に寄。夫れでは

あなたはごう有ても。何の別れてよ
いものか、たごひ肌にせまつても、
心の内は安樂世界。アノ結構な御本
家も。サア情がななくば石瓦。壁もあ
らばの託住も、あはれが結句嬉しい
ぞ。云ふにこなたは猶嬉く、過し廓
の春秋や、花の朧に逢ひそめて、又
の逢瀬をほとぎす、待てごつれな
き一聲に、胸の思ひは螢さも、飛べ
ば飛かう胡蝶より、風も忘れてかり
がれの、かはす翼に霜降ば、いさ
燃へ立紅葉ばを、戀の限りと思ひし
も、戀の麓にまだ迷ふ、雪さ身にし
む真心は、悲しいものさよと泣、
男も同じ哀樂の、きはみを今ぞ思ひ
知る、空もしぐれて見えにけり。降
らぬ内にさ箱取上げ、行くをおそく
は門の月に、立ちて送れば月は西、

君は東へあけの朝。過ぎしきぬく
思はれてせめて釜には松風の、音た
ざらせて置ふかま、清水汲では爐に
むかひ、獨り靜に待居たり。雲は走
るか夕時雨、煙うるほふ鳥部屋の、
歸るさ遠き老の足、細由は晴間待た
ばやま、あたり見れ共小家がち、曉
の伏屋にや、深き、軒に避くれば丸
窓の、中もしぐれの松風に、あはれ
伽羅たくぬしや誰、中にも誰さよし
の窓、少し開けばはら／＼と、袖さ
袖さに降霜。申し／＼そこでは雨が
かゝります、マア此方へお這入なさ
れませいなア。ヤ有難う存じます。
イヤコリヤどうも仕様がない、夫で
は御免なされませと、入れば託しき
あばら屋に春はひそむか、一ひらの
花の手づから立て出す、木の芽いろ

添琴の音や。唄花は雪、時雨はたれ
の涙ぞや。ふにしあやしき假の宿、
知るも知らぬも夢の身の、何を隔て
ん世の中は、さなきだに墨繪にかき
し松風の聲。詞ア、珍らしい小倉の
色紙、山の中にも鹿ぞ鳴く。花の傘
は此時雨が、松風は與次郎の、釜に
波立つ阿彌陀堂、樂は光悦様でござ
りますか。イエ主の手つくれでござ
ります。ヤ夫れは一しほ面白い、襖
立つ山の秋のくれ。さびしい中に一
色の、紅葉の蔭の此お手前、ア結
構なお茶でござります。是は痛み入
まする、最一ツいかいでござります
有難ふ存じます、はからず上つて此
御馳走、失禮ながらお召使もなく、
御主人は御不在さ見えますな。ハイ
一寸そこ迄参りました。そして只お

二人のお暮してござりますか。左やうでござります。夫はまあ一体何をなされませぬ。あたり見廻はしすゑ物や、扇、短冊取上て。エーナニ破窓に伽羅の染込む時雨がなく。イヤ是でこそ誠に風雅じや、世を遁れた樂隠居、遊んで暮せば穀つぶし、世を捨てた道心も功德がなければ死人も同然、職もあり、樂も在り、訛もあり、花もあり、是が誠に浮世の味、イヤ茶の湯の味でござります御主人はごなたやら、私にも悴が一人ござりましたが酒は呑でも茶は飲まず、遊びは知つても道は知らず、たわけを盡した其果は、さういふ勘當しましたが、ごうなつたやらそれぎりに行衛も今に分りませぬさ。云へばおさくば手を止め。なぞお赦し

なされませぬえ。夫は赦す事は成ませぬ、浮世の味を悟られば、内へ入れても人にはなりませぬ。ムゝそんならお悟りなされましたら。ア、イヤくまだ最一ツ成ぬ譯がござります、氣強いと思し召かば存じませぬが、それも又此世の道、魂から磨かねば、身も立たず家も立たず、まんざら教へなんだのでもござりませぬが、不足がないだけ氣儘となり、魂抜けて色狂ひ、今では何となつたやら、まだ迷ふて居るか、悟つたか、氣が違ふたか、死だか、秋の夜長の寢覺がち、やういふ寒う成に付、京の町をうるく、恥かしい姿しをらぬか、海山隔てた遠國で、苦しい業でもして居るか、問ふに問はれぬ其せつなき、思ひのせい

か、身も弱り、先も見ゆる老の命、もしや是切逢れぬか。人知らぬ涙もこぼしますと、云ふこなたも身の上に似たるあはれの俱涙、拭ふ巾も濕ふて、帛紗さばげごさばかれぬ、うきは戀路の終とは、あけて云はれぬ藁より、うつす木の芽は薄くとも、心を汲んで今一ツと、又立ちかゝる其所へ、つか／＼入來る侍源吾。主はごこじやごこへ參つた。ハイ只今一寸出ましたが、何ぞ御用でござりますか。ヤア何ぞ用さばはしら／＼しい、きり／＼早う出してしまへ。エ、出せとばそりや何をへ。エ、まださばげをる、利休の茶碗じや、ありや此方より注文して、体よく繼げいさ申付たに、贖物を拵らへて、本物を打割つたさば、けしからぬ横道

者、彼は云はずサ出して仕まへ。テモ割つたに違ひござりませぬ。何割つたに違ひない、コリヤ、く、彼品を何と思ふ、千金萬金を積めば逆再び手に入品と思ふか、御秘藏の中御秘藏を打割つたでサ、濟むと思ふか、イヤサ割れましたと言上成ふか、腹切つて申譯此方は厭はぬが、夫斗りでも濟まぬわい、主の首を目前にかければ、お怒ばよも解けまいサアくく早く是へ出せい、是へ出せいと、烈火の勢ほひ詰めかれば、お徳は水に請流し。マアそふおせきなされますぞ、お静にお茶一服エ、此騒ぎに何の茶所か、一体何として打割つた、よも寵相さば云はれまい。サア夫れは。やつぱり隠して居らふがな。何の左様ないつわりを

そんなら何故。サア。サアくく云譯なくば、覺悟致せと責付られ、お徳は思案の胸を据。よろしう御ざりまする、そんならどうぞ此私をくまりなりとどうなりと、ありや私の咎で御ざんす、是非命が入事なら、主じより私を切、云譯立て下さんせいなあ。チ、好い覺悟、サア觀念致せと振上る、白刀の下に茶碗を取上今を最期の此一服と、手もふるはさす呑みほす体。紹由は感じ居たりしが今は猶豫もなり難しと其中へ割つて入り。マアくお待ちなされませくハテサテマ、お待なされてなさりませ、イヤ委しい譯は分らぬが、兎に角割れた利休の茶碗、いかに名器と云ながら、人の命に替へいでもどうか仕様がありそふなもの、コレ

お女中あなたも何ぞ云わけは御ざりませぬか、サア其譯は知りませぬが一寸聞ばひごい缺けやう、國も時代も違ふた士で、底を付け續きたしましても、猶更風情がござりませぬ故其風韻を呑込んで、新に作つて見ますれば、元が有つても無用の缺け、元が有つては迷ひの種と、夫れで碎いて仕舞いましたと、云に紹由は手を打て。ヤコリヤ面白いそくじやくくく茶の味はヤそこに有、缺けた名器を珍重しやうより、其風韻を得たからは、元の形を無にするさば、禪家の風も有様な、あなたの御主人はどなたやら、こりや其通り言上なされ、よもや不埒さばおつしやりませまいと、云へど源吾は聞入れず、ア、イヤく其様な事ではゆ

るされぬ、邪魔よませず退のげく是非せひ共首ともくびで申ま譯わさ、又またふり上ある及およびの光ひかり、止とめても止とまらず、拂はひつ除はずけつ、あはやつれなき木枯こがれに、飛とぶか落おつるか、消きゆるかこ、力ちから限かぎりに争あふ所ところへ、思おもひがけなき本阿彌ほんあみ光こう悦えつ、夫それと見るよりかけ入いつて、まゝお待まちちなされ源吾げんご殿どの、茶碗ちawanの事ことなら云い譯わ入いらぬ、應山公おうざんこうには殊ことの外ほかの御機嫌ごきげんじやこ、いふにこなたは又また驚おどき、それにはまた何故なにゆゑに。さればさ今いまお館やかたへ上あつたら、一ツの茶碗ちawanをお見みせなされどうじやこ仰おほせなさる故ゆゑ、取とつて見みるさハア面白おもしろい、利休りきゅうが見みても得心ごうじんしさうな、よい出来できと申ま上あたら、夫それはこちらの作さこやら、しかも元もとの名器なめいきを碎くだき、新あらたに仕上しあげて返かへへしたこは、確たしかに名手なかしゅの腕はらわたじやこ、モ殊ことの

外御賞美げごうさうびじや、モウ心配しんぱいには及およばぬさ、聞きて源吾げんごも落おちいて然しからばこのまゝ館やかたへ歸かへり直すに御意ごいを伺うかげう急いそぎ足あじて出いで、行く紹じょう由ゆうは殊ことに喜よろこびて。ヤコレハ光悦こうえつ様さま、よい所ところへ御出ごいで下くださりました、夫それでは應山公おうざんこうのお説あへで御座ござりましたか、それなればこそお叱ちりもなく却かつておほめなされたこは流石りやうせきぢやなあおふして又また當家とうけの主人しゆじん、殊ことに此女このむすめ中はモシ一ひと体てい何なにで御ござりますこ、小野こので問とへば打笑うちわらひ。まだ知らずか。ハイはからす今の雨宿あめどまりに一ひとぶくよばれてまだ名乗なりも致いたしません、それではマア何なんも見みぬるな。さればあの氣高けだかい所ところは上うつ方かたの御落胤ごらくいんか。イーヤ違ちがふ。ム、そんなら覺悟かくごのよい所ところは、お侍さむらい

の流浪りやうろうしたのか。イーヤ違ちがふ。ム、夫それではあの床ゆかしい風情ふうせいの有あるのは、士佐し衛えでも抜ひけましたのか。まだちがひますか、それではもしや妖怪やかい變化へん化くわではござりませぬか。ハ、元もとの姿すがたを變化へん化くわしたありや吉野よしのじや、こなたの息子いきこの思おもひものぢや。エ、何なにと憎にくうは有あるまいかのこ、云いへば紹じょう由ゆうは言葉ことばも出いでず、あきれ果ほたる其その折おから、立歸たてかへる三郎兵衛ざぶらうべゑ、思おもはず顔かほを見合あせて。ヤア親父おや様さまか。チ、悴せがれかこほろりと落おつる一ひとしづく涙なみだと共ともに光悦こうえつはおもひやり。さあ勘當かんたうはゆりたく是これから吉野よしのも改あらためて、灰屋はいの家いえの嫁御よめご察さつ、もう云分いひぶんはあるまいさ、あなたこなたを納おさめる本阿彌ほんあみ、紹じょう由ゆうも今は殘のこりなく。ハイくく

何の申分もござりませう。ヤそれでは改めて挨拶を、イヤ是は始まして誠に不思議さ申さうか、モよくく

に身をあらひ、吉野故に又歸る家は心の宿りぞと、知れば罪にもすぐはる、此世は時雨さ暗れにけり。

の縁さ申さうか、知らずに逢ふて嫁舅、心の底迄香込ました、モウくくこれからは千代八千代變らぬかためは本阿彌様、仲人ご成て下さりませぬか。イヤ仲人は此時雨じや三々九度よりお茶一服、それで儀式ハヤちやんと仕舞た。成程左様でござりますな、ハハハそんならこれから直に本家へ、サアくイヤコレ嫁女、此家も買ふて吉野窓、此儘印に残しませうと、顔もかやく夕日かげ、吉野故に落ちぶれて、浮世の波



秋
あはれ千種の露を
涙とも虫さも

八陣守護城

主計之助早打の段
正清本城の段

主計之助早打の段

中豊竹駒太夫
竹澤團六

人形

島津義廣 桐竹門造
鞠川玄蕃 吉田玉市
妻葉末 吉田文五郎
船頭 灘右衛門
實は後藤元兵衛 吉田玉松
加藤主計之助 吉田玉幸

この淨瑠璃は「厭蝕太平記」によつて加藤清正を中心とする豊臣家の没落を書いたもので家康の爲に清正を毒殺された條りであります。せかいを北條にもつてゐつて主要人物は凡て別名で表はされてゐます。仍ち森三左衛門は池田三左衛門、兒島政次は後藤又兵衛、佐々木高綱は眞田幸村、大内は島津、主計之助清郷は加藤忠廣、時政は家康、お通の方は淀君に當て、御座ゐます。正清は小田の幼君を抱いて孤忠を盡します。近江琵琶湖に幼君と正清の乗つた御座

船顛覆の危難も辛うじて免れますが遂に二條城の饗應に時政公の爲に毒酒を盛られます。毒酒さば知つたが飲まれば違勅の科、森三左衛門が毒盃を取つて犠牲になつた義心に感じ盃を取つたのでありました。命數を知つた正清は肥後の本城に引籠り夕陽さゝもに沈む主家の運命を啣ちます。一子主計之助の新妻羅絹は森三左衛門の娘とて離縁され夫に標を立て、自害して果てます。兒島政次佐々木高綱の兩軍師を味方に得た正清は安堵の中に瞑目し、兩軍師は幼君を擁して大内氏に據るさいふ筋になつてゐます。

(床本) 主計之助早打の段

玉泉山に神を現はす關氏の義名我日

本に髪髻たる加藤正清歸國の後心願
有と引籠り百日の齋戒もけふ満願の
日に當れど奥方始め一家中對面さへ
も夏過て秋に残んの曇を拂ふ水は案
内の客設け心に苦のない腰元ども一
つまころに寄こそり何と照葉今日
都から上使のお入其中に取わけて大
内義弘様歸國の次手殿様を見舞かて
らのお立寄したがいつぞやから殿様
はむつかしい智恵が入やふ思案にく
れて閉籠りお傍仕へは森の娘子纏組
様只お一人奥様にさへお逢ひなされ
ぬアリヤマアごふいふ事ぢやあうと
いへば深雪の發才がコレこなたは知
すかやあれはのふ娘御を連れて戻り嫁
にする氣はする氣なれど若殿より大
殿がアコレくくそんな事いや
つたら唐迄きこへたこはい殿様脱み

殺されふも知れまいぞやチーそれで
も百日の間たつたおふたりヲホー
いか様そこも有はいのさ何の遠慮
も高咄し後は笑ひの折からに早御上
使の御入さ案内の聲に悔りし部屋へ
入る後玄關よりのけ反通る時政の近
臣鞠川玄蕃伴ふ人は隣國に大家さ名
にし大内義弘優美に餘る長袴しづし
づま打通れば出向ふ奥方しこやかに
遙こなたに手をつかへお二方とも遠
路の御來駕夫正清速にお迎へ申答
なれども歸國の日より百日の心願有
と閉籠り他門はもこより一家中通路
無用と堅い言付日頃の氣質詮方なく
女の出向いお赦しなされ下さりませ
と折目高鞠川玄蕃心に黙きスリヤ正
清には別間に籠り餘人に對面いたさ
れぬさな。併主人北條殿大切なる内

意の上使ぜひ直談も立上るを義弘押
留め先待れよ百日の齋戒もけふ満願
に及ぶと有暫しの猶豫がサ無にもな
るまじ某とても加藤氏に何卒面談致
したいイヤナニ奥方よきにお取次サ
アわらはこても逢見ぬ夫つきそふ娘
に言入させこたへ有まで暫しの内ハ
テむつかしいイヒー、然らば暫時
休そく致す大内殿にも客殿へアイヤ
拙者は後よりまづお先へソレ腰元ご
も御案内と葉末があらひ鞠川は胸
に工みの舌なめづり案内に連れて入に
ける義弘後を打なむめ前後に氣配り
聲をひそめ奥方には嘸御心配正清殿
の御病疾容体はいかゞでござるなエ
何とおつしやる夫正清病氣さはい
ヤサおかくしなされな入魂の義弘他
言は致さぬ御大切にござらふむやサ

アわらはこてもいつぞやより對面は
 いたされ共障子隔て夜毎の鏡ひも常
 にかはらぬ詞付ハテナア此國の分野
 にあたり主星光りを失ふ天變ム善
 か悪かご名將も暫し疑惑の折こそあ
 れ下りおらふく口々にさゆる
 奴も首筋元兩手に引きぎのつきく
 行尺合ぬ上下も借着さ見へし大男こ
 しに付けたる繩のはし引づる樽の疵
 づみ宙にぶらりの角介丸平いびつ
 になつて反打たりハハハハ登り日
 和の追風を捨是の旦那を見舞ふと懸
 く上つた灘右衛門といふ船頭じやは
 いハアいか様事を分て言を聞けば
 船頭に違はぬ證據 灘右衛門も荒か
 つた、なる程そふだくこでつかい
 しけに合ない内さ尻に帆かけて逃て
 入る見向もやらず件の男椽先にもみ

手して、へいそこにござるはおゐさ
 んじやな旦那殿の御病氣マお心遣
 ひでござりましよいつぞや唐へござ
 つた時雇はれた此灘右衛門見舞の印
 はコレ積合したこのつき樽生ぐさも
 のは此葉づと少分ながらさ差置けば
 奥方猶も氣にかかり義弘様の仰せい
 ひ堅固にござる我夫を灘右衛門さや
 らも同じ見舞ハテふしぎなきとつ置
 つ思案の胸もさは立葉末義弘押へて
 アイヤく奥方正清殿は壯健なるぞ
 イヤサ病氣杯は彼めか産忽殊に土
 産のその葉苞海魚にあらぬ金氣殺伐
 サ披露は追て先歸れハアそんなら且
 那殿はいよ御無事にござるかな
 いかにもかはらぬ大丈夫さあらぬ
 詞に根を押して、此國の主にたさへ
 し星の光りに存命叶はぬ印が有つて

スリヤ其方が天文をこなた様にも葉
 苞を、ハテしるも知ぬも加藤氏に對
 面の上取次致さふヤ有難いはハハハ
 御大身のお取次までもの事に此
 酒樽お頼み申さ義弘の頭上を目むけ
 打付る兩手にしつかさハハハハそ
 ちが酔酒の此つき樽義弘髓かに届け
 くれるそんなら旦那殿に逢迄はお壺
 所にやかかり船、チ、何日なり共休
 足しや義弘さまにも奥の間へ然らば
 後刻さ葉苞を手に携へし名大将礙お
 ろした一曲者引別れてぞ入る、後に
 残る葉末は氣も濟す案じ重る時しも
 有れ城門俄に騒しく若旦那の御歸國
 さ呼ばる、聲に數多の同勢早かごを
 引げる白布白砂蹴立廣椽先に昇すへ
 たり、見れば我子の主計之助火急の
 早打息切を瀧す母が氣付の水、コレ

主計之助母じやはいのふく
主計のふと呼生られ初めて正氣付
たる主計ヤ母様チ、爰は本城かハ
ア嬉しや、忝なや父上様の御容躰
御大切に及ぶと聞最早御逝去なされ
たかサ、早ふ聞して下さりま
せと言後聲もせき切て涙と俱に尋ね
れば母は興さめい、や何事そなた迄
が同じ様正清殿、御病氣さは、イヤ
く、おかくしなされなかつぞや
父上歸國の砌森氏と縁邊和歌の取結
び酒に仕込みし時政の奸計是に當り
て三左衛門殿其日に落命有し故正清
さしもの勇將なれ共本國迄は叶ふま
じと此頃都の風説を聞いて苦しむ六日
以前森の後室、御殿私と共招き寄
せ正清病氣の聞へ有汝見舞として本
國に馳下り存生ならば使者は私死後

の使者は、柵殿と生死二つの御教書
を二人へ分て賜はりしは父の安危を
探らえ討畧チエ、憎しさは思へども
胸をさすつて取急ぎ着岸の津より後
室に先立早駕氣は早鐘かけ來りしも
母上に父の様子を聞たいばつかり國
の大事を思し召おかくし有は斷りな
から心に覺悟も致したし、コレく
く、包まず明し賜はれと思ひ込だる
物語り始終を聞いて又悔りチ、思ひ合
せば最前に合點の行かぬ灘右衛門義
弘殿の詞のはし割符を合す今この時
宜心元ない夫の安否正すは主計コレ
斯々さ耳に口そんなら父に付添居る
雛相殿にサそなたが逢て間、近道ハ
ア畏り、奉るコレ必ず密に心得ま
したさゆふぐれ時鐘の響は寂滅爲樂
胸にこたゆる親と子が引別れてぞ。

(床本) 正清本城の段

M 行く先は二重に建し思惟の間、
人の出入は止むれど、秋を告來る風
の聲庭の木草におさづれて、すだく
虫さへ物凄き。我本城へ我ながら、
心置く露踏分けて、窺ひ來たる主計
之助、隔の垣に身を寄せて、母のを
しへの綱手繩、引けば鈴虫それぞこ
は、豫て松虫雛絹む、手燭携へ庭に
おり。母様お越遊ばしたか、イザ此
方へさゆふしでの、神の結の縁ぞこ
は、思ひがけなき主計之助、ノウな
つかしやと雛絹む、切戸押明け走り
寄り、夢ではないか嬉しさの、後
は詞も泣許り詞ヤレ音高しく密に
密に、先何より父の身の上、餘人
を遠ざけお身一人、おそば仕へ有り
と聞く、物いみなりさは心得ず、コ

正清本城の段

切 豊竹 古鞆 太夫

鶴 澤 清 六

人形

加藤 主計之助	吉田 玉 幸
嫁 雛 絹	桐竹 紋十郎
妻 葉 末	吉田 文五郎
加藤 正 清	吉田 榮 三
鞠 川 立 蕃	吉田 玉 市
後 室 柵	桐竹 政 龜
船頭 灘右衛門	吉田 玉 松
實は後藤元兵衛	
島津 義 廣	桐竹 門 造

レ様子聞かして下されど、すかしなだめて尋ねれど、こなたは猶もすり寄つて詞コレ申し、久しぶりで逢ふた私、無事にあつたかかはらぬかこたつた一言おつしやつても、不孝のさかにもよも成まい。其お心さは露しらす、都でお別れ申してより、勿体ないこそ乍ら、父様母様を、思ふ案じはごこへやら、あなたの事が苦になつて、ほんに寢た間もわすれ兼ね、逢ひたい見たいさあけくれに、こがれしたふてゐる物を、聞えませぬと娘氣に、後や先なるうちみ言、詞ホ、尤もながらそれは内證、けふ國へ歸りしは、我のみならず母御も同船、湊口より魁せしは、父の安否を尋れん爲め、コレ御病氣に相違あるまいかの。アイ別間の様子は母様

始め、誰にも云ふなご口留なれど、さうおつしやればお食も少し、折々手箱の草の根を、出しておあがりなさる、計り、亥の刻よりは樓にて、御祈念有るも只お一人、ム、それこそ仔細であらん、母上お聞なされたか。委細は是にて聞きましたと、思ひがけなき切戸のかけ、出づる葉末を見て恟り。様子あかせし案じ顔。母は娘を押し解め、別間に向ひ手をつかへ、詞都の御所より上使として、主計之助参上と、取次ぐ母の詞より、外にこたへもなき折ふし、あやしや庭の草隠れ、あらはれ出でたる數多の鼠、コハいぶかしと三人が、すかしなむむる間もなく、透をつたひて樓閣へ、連々さして入るよさ見えしが、俄に人聲烈しき物音、スハ一大

事さかけ寄る障子、蹴はなす別間は
燈火も、消えてわからぬ眞暗がり、
數輩を相手に正清が、或は捻首手足
をもぎ、あたるを幸ひ人つぶて、投
出す庭先主計の助、得たりさ仕留る
早速の働き、後に控へし鞠川玄蕃、
正清やらぬさしつかさ組む、ふりほ
ごいてかんづまつかみ、膝に引敷大
音上詞ヤア鼠と變じ我居間へ、問者
を入れしは時政の家來、忍びに名を
得し鞠川よな、首引抜くは安けれど
助けかへすは都へ使ひ、我存命を物
語れよ、宙に握つてゐいやつと、投
げ越すからだは堀の外、鼠さなつて
逃げさりけり。主計の助は父の聲、
聞く嬉しさにさし寄つて詞時政公よ
り父への使ひ、何にもせよあかしを
照し、御教書御披見下されよ、椽側

に直し置く。披きもやらず高笑ひ、
詞ハ、此書面見るに及ばず、日本無
双の正清を、味方に付けん何んど、
は、あさどぎ計略、ヤイ主計の助、
おのれ生年十七歳、忠孝信義の是非
をも分たず、大切なる幼君の、守護
に残せし效もなく、時政の甘き詞に
たらされて、おめくご歸つてうせ
たは、女に迷ふ大馬鹿者、御教書な
ご、は穢らはしと、引きき庭へ投げ
捨てたり。主計はハッさ赤面の聞な
ければ母が引取り詞そりや餘りお氣
づよい、何ぼうお氣に叶はいでも、
助けられたる恩は恩、あの子の難儀
になる事を、思ひ返して給はれよ、
母の願ひも慈悲なりし、思案を極め
主計の助、座を立上つて、實に誠、
詞親子兄弟鉢盂と成るも、戦國の常

武士の習ひ、母上御無事さかけ出す
を、ア、コレ、其一言が敵味方
侍の義と云ひなむら、母が悲しさ
此子が思ひ、後の歎を推量して、マ
ア、待つてたもいのと、母、諫め
雛絹も、たさへお返事遅くとも、父
上都にましませば、お首尾悪うはな
されまい、頓て母様お越まで、待つ
て給はれ待つていのう、詞コレ、
申し舅御様、親子夫婦の生別れ、不
便と思し只一言、お留なされて下さ
りませ。お慈悲、ご手を合せ、拜
む内にも戀人に、離れ難たなき女氣
は、哀れにも又いぢらしき、詞ホオ
娘が願ひ去る事乍ら、執なしすべ
き三左衛門は、よくに落命いたしつ
らんが、女の縁に主計の助、其身を
立つる心なるや。アイヤ、父上の御

以前にかはる六具の出立、妙法蓮華の七字の旗、主計が俗名書添へて、弓手に押立て座したる姿、武威三軍に鳴ひゞき、唐國迄も今の世に、おぢ恐るゝも理なり。妻は見るより詞ヤア〜我子の佛果を其旗にお書き有りしは死ぬるのを、御存じあつてか何故にぞ、問ふもう〜柵親子、俱に様子を氣遣へり。詞オ、時政の恩を請けまじこ。我強く云ひしは都にて、命を捨てよと教へる謎、親が胸中能く知つて、歸國以前に雛絹へ、離縁の状を認めしは、女に心引されず、忠義に死る伴も潔白、ハ、ア健氣にも出かしたり、それに連添ふ身程有り、娘も貞女も育ばら、我子へ立つる心の操、ホ、適なり雛絹、敵さ成り味方さ成る

も此世の業、せめて未來は佛果の縁結んでくれんぞ此旗に、二人の俗名書付けしは、親がゆるせし夫婦のため、コリヤ寂光淨土に生を受け妻よ夫と睦じう、誰憚らず添ひさげよ。南無妙法と閉づる目に、不便の涙はら〜、唱ふる經も口の中手負ひの耳に通じけん。詞エ、有難うござります、其お許しを聞きまして、嬉しう成佛いたしましたる、主計様には覺悟さは、悲しい中にも私が樂しみ、あの世の道で待合はせ、一つ所に参ります。二人の母様舅御様御息もじと計りにて、娑婆の名残はにつこりぞ、笑ふて息は絶えにけり。ハ、ア悲しやと柵葉末、死骸に取付き抱きしめ、身も世もあらね悔言、詞生れて此かた二親の、手も

ま放れぬ此娘、よく〜思ひしたへばこそ、百里二百里此國へ、勇ず、んで只一人、來た心根がいらしい夫婦となつて其日から、國さ都へ引わかれ、死る今迄一夜さも、添臥しもせぬ薄い縁、結んだ神も恨めしいそればかりか夫にもおくれ、残る一人のいさし子の、自害するのを見やう迎、はる〜來たは何事ぞ、甲斐亡骸を右左、おしや可愛の數々を、露置く葉末柵も、數へ立て數へ立て、涙々は漲りて、満くる汐の荒岬浪打寄するが如くなり。歎きの中へ灘右衛門、息を切らしてかけ戻り詞コ、且那殿、小陸に忍んで様子を聞き、息子殿を助けうと、追つかけた一里の松原、長持へ入れかけ出す所南無三寶さ走付き、組んづ轉んづし

て見たが、多勢に無勢雲霞、跡に残つた此状箱、上書は加藤氏へ、湖水の某、お前は知つてござりますが、さ差出す、様子を聞いて正清は、物をも云はず封押切り、詞八十川の其源は變ることも、心近江の末をみつうみ、フウハレ心地よき秀句ぢやなと、吟するこなたに聲高く詞ホーウその歌の心は大内義弘、疾よりは是にて承知せり、正清殿に對面せんご、明智の大將物蔭より、欣然として出たまひ、携へ持つたる薬苞の、中なる劍取り出し、詞燒及にあらはす足下の本心、よく見られよさ差出せば仔細あらんと頂戴有り、さつく詠めて抜放せば、俄に一天照かやき、北斗に映する劍の光、赫々たる其有様、正清はつま押し戴き、詞これぞ

北辰尊星より、授かる處の七星丸、それがし年來守護せし名劍、幼君の御味方になるべき勇士を選出し、劍を渡し下されよと、片岡殿へ頼置きし甲斐あつて、劍を證據にきたられしはそれなる船頭、誠は備前の住人兒島元兵衛政次殿、今日只今幼君の味方に屬する割符の一腰、慥に落手仕るご、劍を鞘に納むれば、詞異議なく兒島元兵衛、真中にごつかご座し詞ホーチ、遠眼力正清殿、片岡氏に盟約せし、我本名を薬苞に、包みかくせし劍の割符、後藤元兵衛政次なり、某味方に屬する上は、先君恩顧の諸侯と語らひ、スハ合戦の時來らば、近江路に根城を構へ、美濃信濃路へ出張して、時政が多數を切所にさへ、追詰め泡吹せ

狸親仁が白髮首、引さげんは瞬く内我方寸の胸にありと、勇みすゝみし勢ひは軍師とこそはしられけれ。義弘につこさ打笑ひ、詞ホー、コハおこがましき兒島が廣言、國威たる北條に、双向ふ心底聞捨ならず、併し小田家より恩義を請し事なれば、只何事も餘所に見ん、今の一首に八十川や其源とあらはして、主計之助を助けしは、近江路氏に隠れなき佐々木左衛門高綱ならん、二人の軍師揃ふ上は、最早安堵の加藤氏、我察祝仕るご、始終を計る名將の、詞は鐵石後楯、實に大國の主なり。正清きつこ空打眺め詞アレ、光りを失ふ將星の、今迄地下に落ちるは、北辰尊星感應あり、百日の満願に、佐々木兒島の兩大將、味方

に加へし今月今日、アラ悦ばしやこ
いふ息さしも心のたるみ、忽ち變る
其面色、見るに葉水か又恟り、扱は
噂に違ひなき、お身の惱みか悲しや
と、すがり歎けば、ヤアおろか
詞時政おたくみは知りながら、否ま
ば違勅におこさん方便、元より命は
天にあり、さはいひながらお通のか
た、斯なる果は御存じなく、歸國の
砌り幼君を、われに抱かせくれぐ
も、お頼みありしその時は、勿体な
しとこいたはしとも、百萬軍の強敵
を、掴み挫ぎし正清が、五体をつら
ぬき、肉を裂くより辛苦かりし、其
心を休めんご、百日の今日まで、胸
を苦しめ身を苦しめ、祈りくし甲
斐あつて、念願届きし我身体、此の
樓にさむべし 詞三左衛門の落命

も、時節さあきらめ 柵殿、葉末も
共にさまをかへ、都の悴が先途を見
よ、さるにても嫁難絹、さぞや悴を
待ちわびて、くさ葉の影を行きなや
み、迷はんここの不便やと、百鍊の
明鏡を、照らすむ如き兩眼に、血汐
をそいく計りなり。歎きをさいめ兒
島元兵衛、此の上は葉末殿 柵殿、此
政次が付添ふて、子息の安否を尋ね
し上、佐々木に膝じて治國の計策、
日本はおろか唐高麗、又向ふ奴げら
みなごろし、幼君四海太平を、その
樓に安座して、見物あれよ加藤殿
さつゝ立上れば、大内義弘 詞ホーナ
勇しい兒島政次、じかし天運いたら
すば、幼君の御供して、我本國へ來
られよと、残す詞は義弘む、妻と妻
へも末々を、いさめて直ぐに歸國の

船路、女心の二人連れ、こなたも法
の蓮葉に、至らせ給へ南無妙法蓮華
經南無妙法蓮華經、唱ふる功德
は先の世に、頓てぞめぐり愛別離苦
會者定離さは聞ながら、歸らぬ事を
くりかへし、おさらばの聲ばかり、
後に名こりば升つたを、出づる本城
外曲輪、注進引はえし樓に、端座合
掌古今の英雄、見上る空に星象光、
照らす威徳ぞありがたき。



上田村の段

竹本大隅太夫
鶴澤道八

人形

下女	お	お	竹	吉田榮之助
下女	お	な	べ	吉田利男
下女	お	き	く	吉田萬二郎
八百屋	半	兵	衛	吉田榮三
お千代	父	平	右衛門	吉田玉次郎
村者	金	藏		吉田文作
姉娘	お	か	る	桐竹政龜
妹娘	お	千	代	吉田文五郎

夏

近松門左衛門原作
食満南北脚色
竹本津太夫 飾付
鶴澤 綱遊 飾付

心中宵庚申

上田村の段
八百屋内の段

享保七年四月廿二日竹本座に初演せられたる近松門左衛門翁の原作をこの度食満南北氏も補筆脚色したのであります、享保六年宵庚申の夜生玉勸進所の門前で夫婦心中をしたお千代半兵衛のこゝを脚色したもので筋は遠州濱松の侍山脇氏より出て大阪新穀油掛町の八百屋の養子になつた半兵衛が女房のお千代が姑に虐待されてその不在中姑去りにされたるを遠州戻りに上田村お千代の

親里へ立ち寄つて知り親の慈愛、姉妹の愛、夫婦の情さ盡せぬ涙の裡にお千代は絶体に取りませぬ誓ひます
(上田村 一旦は連れ戻りますが姑はごうしても入れることを拒みます半兵衛は姑に悪名を着せたくなく、さりさて、夫婦は生きて添はれぬ仲ご覚悟を極め今は絶体絶名宵庚申の夜お千代を連れて生玉勸進所へ心中に出かけます(八百屋内)

(床本) 上田村の段

五月雨程戀ひ慕はれて、今は秋田の落水、軒の玉水さくくござれしげくござれば名の立つに玉水近き山城の村は上田に家富みて、庄屋に並ぶ茅屋根も内暖かに下女並んで紡む綿車、手廻りもよくいくはへか庭に

五つの穀、積む蓬萊の島田氏、平右衛門といふ大百姓、妻は去年の秋霧さ消ても残る娘二人、總領かるに入簀を鳥飼より呼迎へ、妹、千代も大阪に歴さしたる舞取つて、身の入前は上田の田島の世話をやきやめば萬事限りの俄病、姉のおかるは側離れず壘所には女子ども、何ぞ今朝から仕事のはかどりたではないか、ちこ休まふお竹お鍋さ呼びつれて、思ひくゝに立出づる、親のすやくゝ轉寢の隙を窺ひ女房は心忙しく奥より立出で、これゝ壘所に人が一人も無さ連合平六殿は淀川筋、新田開きの御訴訟に大事の病人振捨ての京上り、男どもは皆野へ行くエ、憎い女子ども我が見る前ではちよびかはして、ちよつこ立てば早ごへ大切

な主の煩ひ薬一つ暖めようともせぬ下々には何がなる圍爐裡の下焚き付けぬか、次郎よゝゝ呼び廻す門の口、駕籠昇きすえて申しゝ大阪の新軔八百屋伊右衛門様からさ、駕籠の戸開くれば打萎れ目許しぼるゝ。縮緬の二重廻りの抱へ帯涙の色に染かへて、泣くゝ出づれば駕籠の者確かにお届け申したさ、言ひ捨て歸るも足早なり、親の家さへ女氣の敷居も高く越わかれて佇む有様姉は見付けヤアおちよおちやつたか、定めて病氣のお見舞ならめ、ようこそゝ何故駕籠の衆止めやらぬ、餘所外でもあるやうに隔心むましい酒一つ進んで往なしやいの、それ呼戻しやこ、いへども妹は差俯き歎けば共に歎かれて、チ、道理々々疾う知

らせんと思ひしに、此の病では死なぬ、氣の取り悪い舅姑持つたおちよ半兵衛も忙しい時分聞あたりさも自由に来るこさはなるまい、案じさするも不便沙汰するなこの病人の氣にも逆らはれず、高麗橋の伯母様常盤町へも知らせぬコレ氣遣しやんな京の御典薬に變へてからめつきりさ薬も廻り今朝も粥を中がさに三よそひ病は請取つて直すそのお醫者様の請合は本腹も同じこそ、其方の顔御覽なされたらいよゝ父様の病はすつべり直らう、嬉しいゝお目にかりやさありければエ、父様はお煩ひか知らなんだゝ何時からの事でごさんするや何ちやお煩ひ知らぬかそんなら其方何しに來た何悲うて泣くぞ、ア恥かしや又去られてさ、顔

押隠し咽び入る姉も驚く顔に血を上
 げなうおちよ五度三度の挿入嫁入も
 世にある習ひさば言ひながら悪い事
 は手本にならぬ恥しい恥かしい口
 でいふばかりが恥を知つたと言はれ
 うか、そなたもかるく三度の嫁入
 尤始めの男道修町伏見屋の太兵衛
 殿、心不情に身代を持願し侍もな
 いやうに成り果て、飽かぬ別れ、其
 次は死別れ、互に難はなれども人
 は其方の辛抱が無い故に去られた
 く、是非難つけ、此の度の嫁入も追
 ひ出さるゝに間はあるまい、忘れて
 も島田平右衛門が娘の風下に居るな
 ん娘持つた人々は寄合茶呑咄にも其
 方の噂、ま一度戻つては親兄弟、人
 中へ顔が出されぬさは知り抜いて火
 に入り骨を碎かるゝとも歸るまいナ

必ず去られて戻るなと、念に念を
 番うた今度の嫁入、よう戻りやつた
 父様お聞きなされたらお悦びなされ
 るぞお顔見せる折があらう、必ず聲
 高に物しやんな、して半兵衛が暇の
 狀取つて戻りやつたか、いや跡の月
 半兵衛殿父御の十七年の弔ひのため
 生れ故郷遠州の濱松へ戻り次第道具
 に添へ暇の狀は跡から先づ往れと譯
 も言はずお腹に四月唯もない身を姑
 御が手を取て駕籠に引きずり乗せ酷
 い辛いさばかりにて、歎くを見れば
 痛々しく子のあるものを夫の留守隙
 くれる姑、心に一物あるはいの、伯
 母聲なからそなたの親分、高麗橋二
 丁目川崎屋源兵衛殿差置いて直に爰
 へ突つける仕方憎いよいよこち
 の人が京からの歸りを待て詰開かせ

大抵では暇は取らぬ、さはいへ世上
 の女夫仲、去るさいふ事誰こしらへ
 憂い目をさせる可愛やと歎けばわつ
 さ泣出す聲、ア高いく障子の彼方
 さ、様の寝入りばな、泣くな〜と
 言ひつゝも傳ふ涙の血筋まで親は泣
 き寄り、哀れさよ、平右殿御氣色今
 日は如何とつゝさ入る同じ村の金藏
 おちよはちやつと姉の陰見付られじ
 ご身を隠せばア、隠れまい〜とつ
 た今堤の茶屋で大坂へ戻り駕籠の咄
 で聞たおちよ殿目出たい、去られて
 戻らしやつたげな、さ、口も氣儘の
 途方なし、おかるははつと餘所より
 も親の聞く耳憚りて金藏様嘖ましま
 んせ、聖ではなし聲びくに言うても
 濟む事、ちよは去られは致しませぬ
 親の病氣を見舞の戻り、奥にはさゝ

様すやくと寝てござる、目を覺して下さんすな、低うく同じくは往んで貰ひ度いさ氣の毒がる程猶聲高親仁寢てか、面白いなんば隠しても體な事聞いて居ます、おちよ殿幾度でも去られさつしやれ、あれこれの聲達も踏み廣げた田地でも百姓の女房には大事な俺が持て一夜さも淋しいめはさせまい、去られて戻つた悲しいさ氣を腐らし、必ず女房振損ふてもらふまい。去る春貰ひかけた時、俺が方へござればよいに惚れかゝつた一念脇に足は止まらぬばづ入るまい、民のさいふも此の鼻に縁が深いからぢや親仁殿にいひ込んで今日からでも我等請込む、姉御大事にかけてもらひましょと、喚けば二人は死に入るばかり、冷す心の奥に

手を打ち、かるよくあいくく南無三親仁起きられた、金藏が見舞ふたさいうて下され、又明日御見舞申さうと歸ればかるは腹も立ち、これく去なすさちよお貰ひなされぬか、いやくいうても大事の縁組日を見て申し出さうさへらす口して立歸るさ、様お目が覺めたか、姉が障子を明くる跡よりちよもおづく差覗けば夜着に凭れて起臥も惱み苦しき老の坂難狩りすさはなけれども落ちくる肉に顔荒れて見交す親の顔と顔堪へ兼ねてなうさ、様お薬あがつてま一度塗者になつて下さんせよ、思はず知らず聲立て、さめく歎き伏し轉ぶ、父も見る目に涙ぐみ大事ないつと來い、つと寄れと腰近く又去られて戻つたな、子

に運ぶ親の心ぬながら千里萬里も行くましてや一つ家の内寢ても寢られず最前より何事も皆聞きしぞ、それも我ながら斯くも心の變るものか五十といふ年の内は行歩心に任せずながら心は若かりし昔に變らず氣も強く義理にも引かれ己れ重れて去られたらば顔も見らまじ物いふまじこの我もありしが六十に足踏込では年ばかりよるでなく月も寄り日も寄つて病には絡まる、身の衰ふる程いやましに案じらる、は子の身の上三度は愚か百度千度去られても去らるゝに定まりし前世の約束と思ひ諦むれば悔みもせぬ憎うもない笑ふ人は笑ひもせよ、譏らば譏れ指もさせ、子の不便さには代へぬぞ老の線言息弱り半兵衛めは遠州へうせて留守の内と

な、其の留守合點萬一うせたりとも
 物いふな顔も見な彼奴が身上百倍の
 所へ嫁入させる、苦に持つて煩ふな
 なう姉下々は野へいつらん、茶沸い
 てちよめに中食させてたもれやこ、
 餘念なき父の顔、姉は悦びコレおち
 よ案じたさつ様の御機嫌日本一、お
 側離れず御介抱申しや、嬉しや胸が
 開けたさ障子を引立てく、勝手へ出
 づる、折こそあれ、門に物まう頼み
 ませう、何方さ答へ入るを見ればち
 よの夫の半兵衛扱こそ縁を切りに來
 たと思ふ心に口ごまくれ去状様よふ
 ごさつたさ、いへども何の氣も付か
 ず旅出立のまゝ笠取つて沓脱に草鞋
 の紐、心も解けてやおかる様、何方
 も變る事あるまい國許へ參る時分は
 事急にて知らせも致さず、氣のつか

ぬ親共留守の内にもさぞ御無沙汰拙
 者も無事に遠州より只今罷歸ります
 フウそれはな、御奇特にようお歸り
 なさるゝさ顔を背けて鼻あしらひ男
 ども女ども誰ぞお茶でも上げぬかこ
 内にぬぬ人呼立てくむやくし顔の色
 合を見て取りながら、半兵衛立ちも
 立たれず仔細は知らず互の心隔ての
 障子さつと明け姉様お藥暖めてさ
 出づるは女房ヤアお千代爰に居るか
 を聞捨て、物をも言はずつゝさ入
 り、障子をはたさ引立てたり、おか
 る様あれ女房いつから爰に何故物は
 申さぬさ懸げども物いはいぬ譚聞き度
 くばこなたの心にお問ひなされ、人
 の知つた事のやうにハ、ハ、可笑し
 い事ではあるこそら笑ひ取つてもつ
 かれずムウくさばかり羞俯向きと

胸つくより詞なし、奥には親のせぐ
 るし聲、夜短かで日の長いは老人の
 身によけれどもそれも息災でかけ廻
 る時の事、病ひほうけて日の長い
 扱々退屈で暮し兼る、ちよよ榎な本
 下して何なりさも讀んで聞かせ、か
 るは何處に來て聞かぬか、我が伽せ
 ぬかうせぬか、せはしく老の氣の
 苛立て、あいにく爰に仕事しながら
 障子隔て、聞きますと、流石半兵衛
 を捨ても立たれず障子の側に立寄れ
 ばヤ親仁様御病氣が容態見たさこい
 はんませしがぶあしらひなる氣をか
 れて、詞を止め折を待ち、共にすり
 寄り聞き居たり、ちよは數多の本取
 出し伊勢物語塵劫記さ、様の側にあ
 るまい綱島の心中もござんする、徒
 然草平家物語なうさ、様ごの本がよ

からうぞ、姉も読みさいた平家物語
祇王が段を聞かう読みやれ、誠に紙
を附けた所があるぞ押開き、母の刀
自泣くく又教訓しけるは天の下に
住まん者兎もかうも入道の仰せは背
くまじき事であるぞ、千年萬年と契
ることもやがて別る仲もあり、あか
らさまとは思へども存らへ果つる事
もあり、世に定めなき物は男女の習
ひなり、ほんにさうぢやと読みまし
て、我が身にあたる憂き涙、ごごめ
兼ねてぞ泣きぬたる、父も不便に目
をしげく昔も今も人の氣の移り易
き世上の習ひ、コレ姉も聞け平家物
語をちよび身に引較べていふ時は清
盛入道は八百屋半兵衛祇王はちよが
身の上よ、その清盛が心變つて追出
すエ、憎や清盛去年舞入せし折から

不調法な娘を進上致した、氣に入ら
ぬ事あらば打殿き縛り括つても直さ
せ、未々までも見捨てず添うて下さ
れかし此の度共に三度の嫁入、在所
は一所どころにて、又歸つては平右
衛門再び人中へ面む出されぬ、娘は
氣に入らずとも我を不便と面倒見て
必ず去つて給はるなチ去るまい
御臨終の折からは先輿は平六殿
後輿はこの半兵衛眞實の子を持つた
と思召せ、今こそ町人八百屋の半兵
衛元は遠州濱松にて山脇三左衛門も
伴、武士眞利、商賈眞利ちよは去ら
ぬ氣遣するなア、忝げないご手をつ
かれ地頭代官の其の外に一生下げぬ
頭を下げし互の契約、物忘れする老
の身にも其の時の嬉しさは骨身に浸
みて忘れぬもの、若い形して忘れし

か忘れぬ證據其身は實父の弔ひにか
こつけ遠州に出かはし其跡で姑に追
出させ養子の親に我罪を塗付くる不
孝者、義理も法も知つた奴があれば
何の武士の果、鯉節の削り屑、人で
なしめに縁組んであたら娘を捨てた
な、ろくに吟味もせなんだかご死ん
だ母があの世から恨みめされう口惜
しいご憤み深き堅親仁、悪口交りの
口説泣、二人の娘も正体涙兎角男に
縁の無い生れ性かさばかりにて聲も
惜まず泣きぬたり、扱は女房去られ
て爰へ戻つたかさ、始めて驚く半兵
衛胸に盤石据えたる如く呆れ返り涙
も出でず暫し詞もなかりしがエ、情
ない女房たご一言一宿のつき合に
も人の心は知るゝもの、まして足か
げ二年の馴染子までなしたる夫の心

知つても言譯してくれぬか親仁様の御立腹申し開くは知つたれ共、我が罪を養ひ親に塗り付くる不孝者その一言からはゆめく存せぬ、我等去りば致さぬと、申しわくる程不孝の上塗り親仁様につがひし詞違へぬ武士の性根を見せる見て疑ひを晴れたまへとすばと引抜く脇差より、おかるは早く總り付き千代も驚きなう悲しやこな様に恨みはない障子引明け走り寄りそめてもさまらぬ男の力父様頼み上げますと、騒げど騒がぬ平右衛門、お身が居るとは知つての當て言、耳に止つての自害かチよい分別、自害して死んだらばあれ見よ八百屋伊右衛門夫婦嫁を憎んで去りしゆへ子は面うちに自害せしと養子に悪名難をつけ、口々に取沙汰せ

ば手柄くさめるな娘存分に自害めされ見物せんその一言に孝心深き肝を挫かれハアさうぢや誤つた眞平を額を摺り着け身を悔み、然らば御暇ぢよも同道いざお立ちやれ、エイ矢張り私を女房に持つて下さんすか、チーたさへ死んでも身体も戻さぬ、盡未來まで女夫くア、忝い父様姉様も悦んで下さんせと、早締め直す抱へ帯、先をたぐつてにじり寄り父ははらく涙に咽び半兵衛これ見や此のしどなき、歸らんといふ嬉しさに、親の病をかさも言はず、悦ぶ顔を見る親の心の内の嬉しさを叶はい見せて、禮言ひ度し、さりしめの無い愚か者伊右殿夫婦の氣には入るまい頼むは其方の心一つ親は老病明日知らず黄泉の底の底までも心にか

いるは千代一人明日の日眼さぐとも姉夫婦にきつと言ひつけ二十の金の取遣りいつ何時でも事缺かせぬ、随分商賈手廣くして娘も事を頼み入る、契約の盃せん銚子く姉よ酒をさらせしか親子の仲に遠慮は無い酒と思ふ心が酒、燗鍋に酒もて来いよ、盃の出る間も焦るは子ゆへの間、引受けくすつとほし半兵衛差さう親子夫婦が水盃、差いつ差されつ汲めども盡きず飲めども酔はぬ水酒盛、不便と思ふ親の氣は餘りて色に出でにける命があらば又逢はう死なば親子の末期の水、未來は八功德池の水この世に思ひ置く事ない二人ながらお往にやれくさらばさ夜着に打凭れ再び詞もかけされぬ、親の心に身を恥ぢて姉につごく言

八百屋内の段

切竹本津太夫

鶴澤綱造

人形

八百屋の	母	吉田小兵吉
甥	太兵衛	桐竹紋太郎
八百屋	半兵衛	吉田榮三
西	念坊	吉田文二郎
八百屋	伊右衛門	吉田玉七
女房	お千代	吉田文五郎
下女	おさん	吉田利男
下女	お松	吉田文之助

ひ交し思ひを述べて立出づる、暫し
 父は起上り、姉なう重れて戻らぬ
 ため、祝うて内て門火焚け、いま
 しくしいさは思へども親に従ふ焚火
 の煙、目出度う爰から焚きますと、
 庭にこがるゝ下もえの果は夫婦が無
 常の煙、灰になつても歸るなご其一
 言をこの世の名残止る名残行く名残
 長き名残と、

(床本) 八百屋内の段

夏も来て青物見世に水乾く、蓮庇に
 よけられし日蔭のちよも舅の家は新
 軛油かけ町八百屋伊右衛門淨土宗
 の願ひ手了海坊の談義に打込み開帳
 回向世話やき仲間見世は半兵衛に打
 任せ大阪中の寺狂ひ女房は内外の世
 話に五つも年ふけて朝から晩迄氣は

奇立て此の半兵衛は藏にべら〜何
 してゐやる見世の賣物がしなびるヤ
 イ松め。きり〜こ水打ちをろコリ
 ヤさんよ糊かひ物の干上るおろなご
 りへて疊んで打盤出してちよき〜
 ぞ打て其のちよき〜で夕飯のおれ
 ばきざめコリヤ松よ今日は五日宵庚
 申甲子が近い二股大根のけて置けソ
 レさんよ茶釜の下が燃え出るこ、商
 賣が八百屋まで八百色程言ひ付くる
 口せか〜こせはしきは大海日の生
 れかや叔母に似ぬ甥の太兵衛が市通
 ひ走りの竹の子片荷には獨活生姜青
 山椒白瓜二つこれはさつても早い事
 でござんすよのおれが戻るば、ても
 遅い事でござんすよコリヤのらつぽ
 今朝卯の刻から内を出て何時ぢやこ
 思ふ晝下り何處で鼻毛をよまれてゐ

た旦那那の誂へ物日覆ひしてさへ傷む時高い物をてんご干し商賣の〇くらばせ、魂に覺えさせんご取付けば牛兵衛走り出て母ぢや人のがこりや尤コレ太兵衛ごにのら〜やつてゐた〇町の笹屋から竹の子取りに矢の使阿波座堀の丹波屋から栗おこせごいうてくる朝倉屋からは青山椒内には切れる返事に困つた太儀乍ら母ぢや人の機嫌直しついで一走り廻つておぢやハテ私ぢやさて何の悪い所に這入つてゐましよ横町の山城屋から呼びこまれ二つ三つ話したばかりそれも外の事でござらぬ此方に誰やら逢ひ度いさて今朝から爰に待つてゐるさいうてくれその言傳私や得意を廻つて来う此方もちよつと行かしやれと誂へ物を取揃へ荷拵へして

出でゝ行く牛兵衛が山城屋を聞くよりおちよが来たである氣ぢられまいご空ごばけハア山城屋からは何の用ごりや一寸いてかうご走り出づるをむすご捕へ舞殿こりやごこへイヤ山城屋から逢ひ度いごサ、その山城屋合點成りませぬアノぬつけりごした顔わいのごちご夫婦は何にも知らぬご思ふてか氣に入らぬで往なした嫁を遠州戻りに在所より咬へて戻つたな常盤町の從弟も所に預けて置き商賣にかこつけ間ごな隙がな女夫こつてり俺ご知らぬでおごかいの、ごぞ俺ご事識りやつゝる十五年世話にした親の嫁ふ女房に随分ご孝行つくし親には不幸つくしや恩知らずめご疊叩いて喚きゐる所へ宵布子の西念坊案内なしにすつご通り熊野屋の權右

様から先達のお約束宗味も刻鐘の開眼粗相な非時致します講中皆お揃ひ旦那寺もさうお出で御夫婦なごり只今ご言ひ捨て歸るそ〜ご坊主、未來頼むばあぶな物アレ親爺殿熊野屋から呼に來た早よ行かつしやれおれや行かぬキリ〜ごしやれごつごご聲、親伊右衛門は後生一遍ハレ娘何をやかましいましたもまたしても牛兵衛さへ見れば敵の様にいふ人ぢや世間する若いもの呼びに來まいもごでもない少々ご事は聞のしにしやいのソレ其けつごうすぎたから親を阿呆にしゐるわいの現在おれが甥の太兵衛を差置きにあかの他人の此の野良殿に家屋敷やるこの母よこしまは少しもないコレ娘それは誰もしつた事今更調べる事かいのそのよな

腹の立つ時は念佛が薬じや兎角如來の御方便修羅もやすそなたを呼びに来るも彌陀如來、參るこちも彌陀如來、機嫌直しやそなただむればイヤこち夫婦が出てゐて跡へお千代を呼入れ留守の間でほたへさす事は成りませぬこなた一人參つて私に俄に目かまうたさ成りと頓死したさなり間に合ひにやらつしやれ、コレ嫌なつた今西念坊が見ていんだわいのこの伊右衛門に嘘つけかあ勿体ない妄語戒の中さるお寺で五戒の割口説聽聞した。三百戒五百戒もつまる所は赤貝にまゝまるさのお談義、半兵衛が叱らるゝも貝のわざ、ハハハ一蓮託生の聞お同行さじやれて機嫌をさりければエそんならマアこなた參らつしやれこのやうな曠毒のもえ

る時に念佛申せば咽にすくゝ立つやうな、心しづめて跡から參らうエいかて、加へてあた鈍な念佛講こんな時はめかり利かして延ばしたがよいわいの、ほんにこちの同行に氣轉のきいたひびりもないさこわい目しらぬ我儘たらしくチーそんなら先へ行く跡からおじや佛法と萱屋の雨は出て聞けさ外へ出れば又有難い事も聞く此度生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも筑後の川中島の四段目から出た事ぢやけな、こんな事も出にや聞かれぬア、有難い南無阿彌陀佛と輪數珠くりくり出でにけり半兵衛一言の答へもせず涙にくれて居たりし顔ふり上げもうし母者人今めかしい申し事ながら武士の釜の水で育ちしこの半兵衛二十二の年か

ら御面倒にあづかり一人の甥子をさし置き家屋敷商賣さも私へお譲りなさるゝ御厚恩、肝にこたへてあたにも存せぬ御恩の母の氣に入らぬ女房なれば私も離別致してこそ孝行も立ち世間もたつ所に此度國元の留守の間に八百屋半兵衛が母が嫌を憎んで姑去りにしたさ沙汰あつては、まんゝ千代めも悪いになされませ判官鼻負の世の中お前の名ほか出ませぬ母の悪名を立て、若い者の人中へ面が出されませうか、親仁様にも面目失はするこゝが一つの御訴訟、少しの間と思召し虫を殺し美しう千代めをお入れなされ其上にて私物物の見事に去狀書いてひまやります、ハイキつこ去つて見せままするホ、ウ其處が男のかうけん貴人高位の娘でも

夫が去るに何ぞ申ぞ時には千代めが姑への恨みもなくお前を慈悲ぢや云はせたい十六年このかたつた一度の御訴訟老少不定の世の中たへ私が先立つても如何なる跡のさびむらひ百、萬遍の御回向より聞入れたこの御一言智識長老のお十念を授る心さばかりにて女房の親や我親と世間の義理と恩愛と三筋四筋の涙の糸、たぐり出すが如くなり母ほいやりと笑顔して、ム、思ひ合ふた夫婦合、まことらしうは思はれど嘘に涙は出ぬ物、眞實去るが定ぢやの、ハテお前をだます程なればこの御訴訟は申しませぬ、チ、嬉しうくおれも鬼にはなりとむない必ず去りや、間に合云ふて欺しやればコレ此母が咽笛を出及庖丁でチヨイぢやぞや母

殺すか女房去るか、それから其方の勝手次第ア、さらりて穢士の苦がぬけた、此世からの生佛さはおれが事足輕う非時に参りましよコチャ未來迄のき去りせぬ間の同行がさこそ待ちやこがれて南無阿彌陀佛く、さんよ其なりでツイ供せいア南無阿彌陀佛松よ又見世のつるしくらうなア、なまみだ南無阿彌陀佛に取りまぜてぶつゝ言ふてぞ出にける、お千代がかさなる五月の重き身ながら足元も手もかるく、帯の下小襦引あげちよこゝ走り、ハア久し振りて家を見た半兵衛様、けふさいふけふ町内廣う戻つたわいの、ア、嬉しやさより添へば半兵衛ギョットし何として戻つた、たつた今母が出られた道で逢ひはせなんだか、さればい

の母様の山城屋へ寄りしやんしていつにない門口からニコくさいさしやいごさしやおれがちよつこの思ひ違ひで苦勞させた、今からいなそのいの字も言ふまいと心誓文立てた娘は持たず天にも地にもたつた一人の花嫁、末期の水取らるゝも骨ひろはるゝもそなた、随分孝行にしてたもそなたにもおれがいさしがる、今お念佛に参る其内に早う戻つて後に逢はう、早ふくゝとさんと桶な物打ちあげた様なお心、皆こなさんの言ひなし故さほんに男の御恩は戴いて居ても、飽きはない松よ久しいな、最早ごも蚊があるに女房主人がなければまだ蚊帳の釣手もなし、アノさんが居眠りでは殆どもの洗濯もできまい、この戸棚の埃はいの、奥の傷

もまだふさがず、香の物も見廻ひたし何からせうやら、氣がうるつ、居つけた所に居て見よさんと座りし茶釜の前、湯を沸して水になる末知らぬこそ異敢なけれ。半兵衛兎角の挨拶せずコリヤ松よ只居すとも藏へいて堆茸よれと人をよけお千代の顔をツク、と見て涙ぐみエ、可愛や利發なやうでも女心、母の言葉は眞實と思ふか、云やる事が皆嘘ぢや、さりながらきのふもくれん、いふ通り、佛法の端も聞き入れ物の慈悲の知つた人、我甥をさしのげ他人の身ごもに諸式ゆづる心からは根からいがまぬ是證據人には相縁奇縁血を分けた親子でも仲の悪いが有る物、乗合舟の見す知らずにも可愛らしいと思ふ人もある人界の習はし、

かうした物、いさしほなげに根からの悪人でもない母を、そなた故に邪見者よ云はせては女夫の者が後生も悪い、母もきげんよう一旦呼返し、改めて己が手から去る筈ぢや、エイ、スリやどうでも去らるゝか、ハテ肝潰す事かいの、死ぬるは二人がかれての覺悟、養親に養もつかず在所の親の遺恨もなく、エ、流石ぢや、見事に死んだと未練者の名を取るまい爲、母に向ひなんぼの言葉盡したと思やるぞ、書置もしたゝめ、死装束脇差も、荒布の荷へまき込み、この世の心かかりはみぢん程もなけれども、金につまつて死ぬる心中も一口に云はれうかよ是が一つの氣がかりよ、ワット泣けばワット泣き、こなさんの孝行の道さへ立た

ば、私も心はのこらぬと、夫婦手を取りすがりより、伏沈むこそ道理なれ、母は念佛の回向より嫁女夫の願以此切徳氣がかりに、よそにゆるりこゐる空も、見せさし頃によつて歸り、のうお千代戻りやつたか、さつきにも云ふ通りちよつとした料簡違ひで物思はせた、いさしやのほんの生如來も見たくばおれぢやと思や永うもない浮世にむこいつらいめ、見て何にせうのう、いややの、コリヤ半兵衛はしりの出及庖丁ようさかして置いたぞや、チヨイとさわつても釵ぢやぞ、アア南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛は半兵衛に合圖の言葉嫁はしらぬと思ひこむ是はつかりは佛なり、女夫は母のきげん顔見ればこの世の本望と思へど、じやくは雨

ぞ降る涙かくすぞ、あはれなる、コ
 レ半兵衛何も忘れた事はないか、日
 の永い時はえて物忘れするものぢや
 よう思ひ出しゃ、お千代泣かす此
 處へおぢやいの、まだ己がこわいか
 此處へこゝへご猫撫聲アイアイお側
 へ参りますぞ、立寄らんぞする所を
 半兵衛取つてつきのけ、女房ばかり
 は親の儘にもならぬ、身が氣に入ら
 ぬ去つた去つた出てうせい、コリヤ
 さんも丁稚もよう聞け半兵衛が女房
 去つたぞ、向ひ隣町内でも母の浮名
 を立てたらば聞く事でないうろく
 せずと出てうせいと眞顔にらむ目
 に涙コレ嫁御おりや去らぬぞや、親
 の儘にもならぬ女夫ア、是非がない
 おれを恨みと思やるなご云へ供何の
 返答も泣入り泣入りしやくり泣き、

ム、其涙はまた母に恨みがありそう
 な有るなら云や聞きませう、イーエ
 御慈悲深い姑御様に何のくご
 ばかりにてかつげとふして泣きぬた
 る、チ、おのれがいふまでもない母
 者人に何の恨み、口手間入れる面倒
 なご小がいなさつて表に引出すこの
 身を遂に行く、後にくご囁きて目
 ませに宿の名残の涙、弱る心を見ら
 れじと門口びつしやり見世ぐわつた
 り鳴るは六つかはや初夜か、時も時
 分も六六に、胸はわけなき五々八々
 知死期近づくばかりなり、あかぬ夫
 婦の生別れ、流石の母もあいさつな
 くお上を立つて奥の間の罪ほろぼし
 の鐘の聲、善照照らすみあかしの火
 を見よも居眠る下女、外に見る目
 もあらめの束、中にかくせし一尺四

寸是が冥途の案内者、魂こむる書
 置箱、地獄へ落ちるか極樂か、未は
 白茶の死しよぞく、くるく包む毛
 氈も、はや紅の血を見れば、死そ
 こないはせまいぞと、一心はすわれ
 ども、のれん一重あなたにはするど
 き母のかれの聲、胸にこたへて身も
 ふるひ、踏ごおほへぬ差足に、かき
 がればづす手もわなく、ソツと出
 でたる門口にやお千代か、おいの、
 サア鰐の口をのがれたサアおぢやと
 手を曳げばマアマアまつて下さんせ
 生中一度戻つてこなさまの口からの
 くぞ去るぞと云はれては未來までの
 氣がかり、此門口でたつた一言去ら
 ぬと云ふて下さんせ、ハテ愚痴な事
 ばかり今宵は五日宵庚申女夫連でこ
 の家を去ると思へばよいわいのほん

にさうぢや手に手をさつてこの世を
去る輪廻を去る迷ひを去るとは云へ
たつた一つの煩悶の愛やおなかに五
月の男か女か知られどもこの子の未
來がいとほしいままで産んだなら何
うして育てう、かうせうと、案じ置
くは皆あだ事、日の目も見せず殺す
かと思へば可愛ゆうござんすこ、か

は人ならぬ死出の田長のほこぎす
同じたぐひの女夫連れ、卯月五日の
宵庚申けふは最後の羊のあゆみ、足
に任せて急ぎ行く。

つげと伏して泣き入れれば、男も聲を
すゝり上げ、己も何の忘れうぞもし
云ひ出したら其方の泣きやらう、悲
しさにだまつてゐたばかりにて、一
度にわつこ聲をあげ、前後正体泣き
さけぶ、聲や聞こえんひそかに名
残も夏のうすころも、死に、行く身



野崎村の段

親 久 作 豊竹呂太夫
 娘 お 光 豊竹つげめ太夫
 娘 お 染 竹本南部太夫
 母 お 勝 竹本小春太夫
 下女 お よ し 竹本町太夫
 久 松 竹本和泉太夫

ツ
 每
 鶴澤友太郎
 鶴澤友太郎
 鶴澤清二郎
 野澤勝平
 野澤友衛門

冬

寒い時分の
 襦袢の袖さへ
 新版歌祭文

野崎村の段

この正本は安永九年九月の近松半二の書下しでこの野崎村は上の巻の第二段になつてゐます、これよりさきに正徳元年四月に紀海音作「油屋お染秋の白紋」があり續いて明和四年に菅專助の「染模機妹春門松」があります、半二はこの二作から粉色したのですが後世この歌祭文の方も盛んになつたのです、全段の内容を記すと、和泉國石津の家中相良丈太夫は家寶吉光の短刀紛失の爲にお家改易となり一子は攝州野崎村の百姓久作の家に預けられ久松と呼ばれてゐたが行儀見習の爲に五町の質店油屋

へ奉公に出てゐるうちに、一人娘のお染と人目を忍ぶ仲となるがお染は山家屋へ嫁入せればならぬ身の上であり、久松も座摩社で金を盗まれた落度もあつて、二人は生木を裂かれて久松は野崎村の久作の家へ歸されます、お光は許嫁の久松が歸つたので大喜び久作は二人に夫婦の堅めをさせよふと祝言の仕度にかゝつてゐるところへ、久松戀しいお染は、野崎の觀音詣りをかこつけて、久松に遇ひに来ます、お染久松お光と三角關係の戀の経緯が生じます、貞女のお光は自分の戀をお染に譲つて髪を切つて、諦められぬ心を二人の幸福にさ捧げます、油屋からはお染の後を尋ねて母が来るし久作も心のほげさ寒紅梅の一枝を渡して久松は陸路を

日 鶴澤芳之助
 鶴澤寛友 市若
 鶴澤吉友 左二
 替 野澤

人形

娘 おみつ 桐竹紋十郎
 下女 およし 吉田榮三郎
 親 久作 吉田玉松
 丁 稚久松 吉田光之助
 娘 お染 吉田扇太郎
 油屋 を勝 吉田小兵吉
 船頭 松造 吉田玉徳
 久作 女房 吉田覺三郎

駕籠でお染は舟で大阪へ歸るさいふ
 道行になります。

（床本）野崎村の段

後に娘は氣もいそぐ日頃の願ひが
 叶ふたも天神さんや観音様第一は親
 のおかけエーこんな事ならけさあた
 り髪も結て置ふもの鐵漿の付様挨拶
 もごふ言うてよかるやら覺束論こし
 らへも祝ふ大根の友白髪末菜刀さ氣
 もいさみ、手元も輕ふちよきく
 く切ても切れぬ戀衣や本の白地を
 なま中におそめは思ひ久松が後を慕
 ふて野崎村つゝみ傳ひに漸々さ梅を
 目當に軒のつま、供のおよしが聲高
 に申御寮人様彼人に逢ふばかり寒い
 時分の野崎参り、今船の上り場を
 しへて貰ふた目印のこの梅、大方爰

でござりませふぞへアーコレもそつ
 ま靜に言やいの久松に逢たさに來事
 は來ても在所の事目立てば氣の毒そ
 なたは船へサ早ふくさ追やりく
 立寄ながら越かぬる戀のさうげの敷
 居高く物申お願申お頼み申ませう
 さ言もこはく緩簾ごし百姓の内へ
 吹まつた用があるなら、はいらしや
 んせ、ハイく卒爾ながら久作様は
 内方でござんかへ左様なら大坂から
 久松さいふ人がけう戻つて見へた答
 ちよつと逢はして下さんせさいふ調
 つき形かたち常々聞た油屋の扱はお
 染さ倍氣の初物胸はもやくかき交
 ぜなます、まな板押やり月口に立寄
 り見れば見る程美しいあた可愛らし
 い其顔で久松様に逢してくれホーそ
 んなお方はこちや知ぬ餘所を尋れて

見やせ、あほうらしいと、はら立聲、心付ればホンニまあ何ぞ土産と思ふても急な事コレ〜女子衆さもしけれ共是なりとも、夢にもそれと白玉か霧を帛紗に包の儘差出せばこりや何ちや〜大所の御寮人様さま〜〜と言はれても心がいたらぬ置しやんせ、在所の女子と侮つてか、ほしくばお前にやるはいな、ミやら腹立に門口へほればほごけてばら〜と草にも露銀けし人形微塵に香箱割出した中へつか〜親子連出てくる久作どうちや繪は出来たて有ふ扱祝言の事婆が聞てきつい悦じやが年は寄まいものさつきのやつさもついで取上したか頭痛もするいかふ肩がつかへて来たア、橙々の數は争はれぬものじやはいの、左様なら

そろ〜わたしがもんで上ませふ、かヤアソリヤ久松 忝い、老ては子に随へじや孝行にかたみ恨のない様にお光よ三里をすてくれぬかい、アイ〜そんなら風のこぬやうに何かな表へ當り眼門の戸びつしやりさしもぐさ、燃る思ひは娘氣の細き線香に立煙り、サア〜親子さて遠慮はないぞ、もぐさも疔癖も大掴みにやつてくれ、アイ〜きつうつかへてござりませぬ、チ〜そうで有う〜次手に七九もやつたも、チツトこたへるぞ〜サアさ〜様すへますぞへ、アツイ〜〜アツ

〜〜アツイ〜チ〜さ〜様の仰山な皮切はしまひでござんす、ほんに風が當ると思や誰ちや表を明けたそうな、しめて参じよ立を引留ハテよいわいの、晝中にうつさしい、ノウウ久松〜〜コリヤ久松餘所見して居すさ、しか〜と揉ぬかしのサア餘所見はせぬけれど視が悪い、折が悪い〜〜と目顔の仕かたヤア悪いの視くのと、足に灸こそすへて居れ、さこもお光は覗きはせぬがなサアアノ悪いさいひましたは、チ髓今日は瘧〇日それに灸は悪い〜とさいふたのでござりますエ、愚痴な事を、此様に達者なはちよ〜と灸をすへ作りをする、そこで久作、アツイ〜〜アツイ〜、何じやはいわが身達も達者な様に灸でもすへ

るのがおいらへの孝行じやそや、チ
いそふでござんす共久松様には振袖
の美しい持病が有て招いたり呼出し
たり憎てらしいアノ病づらが這入ら
ぬやうにしきの上へ大きふしてすへ
て置たいはいな、アツイ／＼／＼コ
リヤヤイお光よどうするぞい、そこ
はあたまじや／＼あたまに三里はな
いはいやいとツトモウひごいめに會
しをるがな、コレお光殿振袖の持病
の色々の耳こすりはしたない事聞
ては居ぬぞや、ホー／＼かはつた事
がお氣に障つたチ、障らいじや、コ
リヤおかしい其譯聞くぞへいふぞや
と我を忘れていさかいを外に聞く身
の氣の毒さ、振の肌着に玉の汗、久
作も持あつかい、ア、コリヤヤイコ
リヤ肩も足もびり／＼するがな／＼

まだ祝言もせぬ先から女夫いさかい
の取越かいいい炙業のかはり、喧嘩
の行司さすのかいいい、エ、二人な
がら嗜め／＼イエ／＼構はふて下さ
んすな、今の様な愛相づかしも病づ
らが言はしくさるはいな、何をいふ
やら、アハ／＼もふ／＼両方共お
れが貰ひじや、ヨ、ヨ、中直しお直
に取結びの盃、髪も結たり、鐵漿
も付けたり、湯もつかうて花嫁御を
コリヤ作つて置けと、打笑ひ無理に
納戸へ連て行く、其間遅しとかけ入
お染逢たかつたさ久松に緋り付ばア
／＼コレ聲も高うござります、思ひが
けない爰へはどうして譯を聞して
／＼と問はれて漸々顔を上げ譯はそ
つちに覺があらふ私か事は思切山家
やへ嫁入せいと残して置やつたコレ

此文、そなたは思ひ切る氣でもわし
やなんぼでも、得切らぬ、餘り逢た
さなつかしき勿体ない事ながら觀音
様をかこつけてあい北やら南やら
しらぬ在所も厭ひはせぬ二人いつし
よに添ふなら飯も焚ふし、織つむぎ
ごんな貧しい暮してもわしや嬉しい
と思ふ物、女の道を背けさは聞へぬ
わいのどうよく恨のたけを友禪の
振の袂に北時雨、暗間はさらになか
りけり、蠶勝なる久松も脊撫さすり
聲ひそめ其お恨は聞へてあれご十の
年からけうが日迄船車にも積まれぬ
御恩仇でかへす身の徒冥加の程も
恐しければ委細は文に残した通り山
家やべござるのが母御へ孝行家の爲
よう得心をなされやさいへごいらへ
も涙聲いやじや／＼わしやいやじや

今こなつてそう言やるは是までわしに隠し
 やつた言嫁の娘御さ女夫になりたいたい心じや
 の是非山家やへ行けならば覺悟はさうから
 極めてあるさ、用意の剃刀取直せばそれは
 短氣さ久松が留ても留らずイヤくくそ
 なたに別れた時も何樂みに生て居よう、
 留すに殺してくと思ひ詰たる其風情そん
 なら是程申てもお聞譯はござりませぬか添
 れぬ時は死るさいふ誓紙に嘘がつかれうか
 いのうハア達て申せば主殺しが命にかへて
 それ程までに思ふが無理か女房じや物、叶
 はぬ時は私も一緒に染様、久松さ互に手
 に手を取りかはす悪縁深き契りかや、始終
 後に立聞親其思案悪からう言れてハツト
 久松お染騒ぐを押へてチ、大事ないくマ
 アく下に居やくハテマア下に居やいの
 因縁さば言ながら和泉國石津の御家中相良
 丈大夫様と言はれこさの息子殿聊の事で

家が潰れてからわがみの乳母はおれが妹
 其縁で十チの年まで育て上たこの久作は後
 の親草ぶかい在所に置より智恵附けの醤油
 屋へ丁稚奉公ソ、ソレ程までに成人し
 て商ひの道讀書まで人並に成たはコリヤ親
 方の大恩其恩も義理も辨へぬはコ、い、是
 見やく先に買ふたお夏清十郎の道行本嫁
 入の極つてある主の娘をそゝのかすまは道
 知らずめ人でなしめア、イヤコリヤコレ清
 十郎が咄しぢや咄しぢやくくはいの、
 さうから意見もしたかつたけれど、今の様
 な事が有ふかそれが悲しさ一日延二日延
 しする間、ふつてわいた金のもめ事や言
 い立て隙を貰ひわけて置のむ上分別と思ふ
 から引算の銀の工面モゴの様にきばつても
 高の知れた水吞百姓はづかの田地着類着そ
 げお光めが櫛笄まで賣代なしやうくこ
 しらへたさつき金なさぬ中でも親子さい

京割
 宛じあ
 詰西橋綿木
 番 九三三二八 話電

荷子第二料理
 八夜由時止

ふ名が有からは肉身わけた子も同然可愛な
 ふて何とせふコレお染様ではない此本のお
 夏もやら清十郎を可愛がつて下さるは嬉し
 い様でア、恨めしいわいの聞ての通りお光
 めさ女夫にするを樂しみに病苦をこたへて
 居るアノ婆さんに今の様な事聞かしたら、
 何と命がござりませふぞいの、若い水の
 出端にはそこらの義理もへちまのかはま投
 やつてこな様さいつ迄も添送らるゝにして
 からが戸は立られぬ世上の口じやはい、エ
 いあの久松めは、辛抱した女房を嫌ふて身
 上のよい油屋の舞になつたばあれやアレ榮
 耀がしたさちや皆欲じや人の皮着た畜生め
 と、在所は勿論大坂中に指さし、れ人交りが
 なりませふかいのコレくくマ爰の道理
 を聞譯て思ひ切て下され申しコレ拜みます
 はいの、ムン是程いふても聞入ず親御達
 が満足に産つけて置しやつた其体を切さい

て淺間しう死るのむ女の道か心中かサ久松
 も其通り不義密夫の悪名受、實親の名を汚
 すばかりが世間の義理も主の恩もむちやく
 ちやにして仕廻のが侍の子か人間か、返
 事次第で思案があるま眞實眞身の剛意見骨
 見にこたへて久松お染何と返事もないうちや
 くり、是程いふても返答のないはコレヤ二
 人ながら不得心じやの、勿体ない實の親
 にも勝つた御恩送らぬのみか苦をかけるも
 私も不所存から、イヤくそなたの科では
 ない皆此身の、徒から親にも身にもかへま
 いと思ひ詰ても世の中の義理にはどうもか
 へられぬわいの、成程思ひ切ませう、チー
 よう御合點なされました私もふつゝり思ひ
 切お光さ祝言致しまするそんならそなたも
 お前も互に目さ目にしらせ合、心の覺悟
 は白髪の親仁アノさつぱりと思ひ切て祝言
 をしてたもるか何の嘘を申ませう娘御も今

現
代
的

廣 告 は 廣 告 社 有 限 公 司



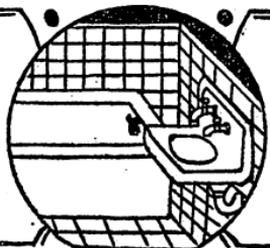
齋部徳太郎 經營

大阪南區御堂津町九

電話 三三五六番

水膝の堤や越ねらん、久作源押拭ひごふやら斯やら合點がいたそふな嘸母御様が案じてござらふ大事の娘御儘なものにイヤそれには及びませぬ母が儘に請取ましたと言つゝ這入れればヤアか、様ハアはつさばかりに詞なく差うつむげばコレお染野崎参りしやつたこ聞て餘り氣遣ひさイヤ氣なぐさみによからうと後追ふて來て何事も残らず聞た夫婦の衆の深切お光女郎の志、最前からアノ表でわしや拜んでばつかり居ましたわいのふ、サア觀音様の御利生だけがあやまちなかつた嬉しさは直にお禮参り、幸ひわしが乘て來たアノ竹輿でコレ久松そなたは堤お染は船、別れ々に逝るのが世上の補ひ心の遠慮ハイ、左様でござります共お志ぢや乘ていにや、娘は船へそ親々の詞に否もいひ兼ねるおしの片羽のかたぐに別れて二人は乗うつれば兄さんお健

でお染様モウおさらばと詞まで早改まるお光尼、あはれをよそに水馴棹船にも積れぬお主の御恩親の惠の冥加ない取譯てお光殿こうなりきたるも先の世の定まり事さあきらめてお年寄れた親達に介抱頼むと言さして、泣音伏籠の面ぶせ船の中にも聲上て、よしなわし故お光殿の縁を切らしたお憎しみ堪忍して下さんせア、譯もないお染様浮世放れた尼じや物そんな心を勿体ない短氣おこして下さんすなへ、チ、娘が言通り死で花實は咲ぬ梅、一本花にならぬ様目出たいさかりを見せてくれ隨分達者でハイ、お前も御無事でお袋とお娘御もおさらば、さらば、遠ざかる船と堤は隔たれど縁を引綱一すじに思ひあふたる戀中も義理の桐情のかせぐいかに比翼を引わくるころ、ぞ。



化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所

西區立寶堀北通一丁目
新橋
岡部商會
電話四四一六、二二六九
阪急夙川
岡部商會支店
電話四四一九、二六

四ツ橋
りよ

九月の文樂座
消息日誌

△九月一日

秋の新作興行の初日開場

△八月三十一日

京都御在留中の東伏見伯には星島家令其他お附の方々をお同伴總稽古を御覽になられ、出演者一同へは御紋章入の御菓子をお下賜になりました。

△九月一日

大阪醫師婦人會主催で無産者病院擴充のための觀劇會がこの興行中開催されます當座も奮て讚意を表すことにいたしました。

薄病院長御夫妻始め其他の御骨折を感謝いたします。

△九月二日

大阪朝日新聞愛讀者のためにマチネーを開催しました。本日より三日四日に渉つて午後一時開幕で

「其幻影血櫻日記」と「お城と文樂」を上演しました。連日多數の申込者のため盛況を呈しました、多數のため申込者に副はぬ處がりましたが何分御諒恕を希ておきます。

△九月五日

BKの舞臺中繼全國放送を舉行しました「其幻影血櫻日記」の五場を放送しましたその前の少時間を利して脚色者食満南北氏の内容に就ての講演をも併て放送しました。

△九月十日

第四師團の軍人マチネー第一次開催觀覽の部隊は三十七聯隊其他約五百名、「血櫻日記」と「お城と文樂」を上場。

△九月十日

大阪御池橋
茶室
電話一三六三番



大阪府中等學校校外教護聯盟主催で全府下の中等學校學生の希望者にマチネーを開催。

「血櫻日記」と映畫「最後の審判」上演
本日より午前十時と午後一時三十分開演の二回二十五日まで連日に涉り續行。

△九月十六日

陸軍に於ける滿洲事變一周年記念催さして第四師團司令部の肝入で出征軍人遺族、戦傷兵等事變關係者を網羅して大慰安會開催寺内師團長閣下の挨拶、中村少將の開會に就て、徳永高級副官の開會の辭等の裡に「血櫻日記」と「お城と文楽」を上演、更に滿洲ニュースを特別映寫して、一同満足の中に午後一時散會しました。

△九月十八日

大阪尚志會の發起で同會員諸氏のために大懇親會が開催されました。會員諸氏の

希望に依て、「勸進帳」と「血櫻日記」を上演しました。

△九月十九日

大阪府中等學校教護聯盟による女子部マチネーは本日を以て第十回に達し一渡り希望者を收容したので終會を告げました府市下の女學生を全部網羅した大盛會でありました。

△九月二十日

問題になつた人氣の秋の新作興行もいよ／＼本日終了しました。

△九月二十三日

大阪府中等學校教護聯盟主催で引ッキ男子部マチネーを本日より廿五日まで三日間五回に涉り開催。

トーカー「少年諸君」サイレント「最後の審判」人形淨瑠璃「血櫻日記」を上演しました。

……なかつた情緒歌南
が呂風水香なかや爽
すまゐてし待お

御宴會口は
まづ！

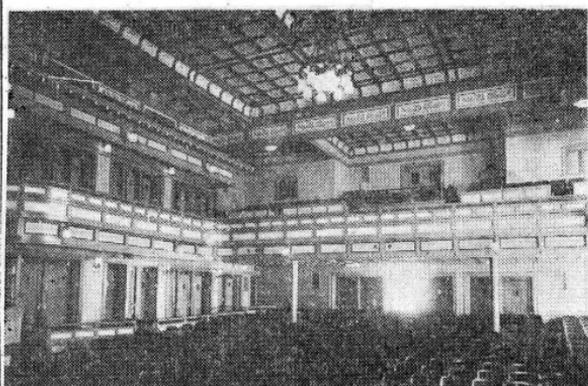


理料泉温一南 のまさなみ

電話一七〇七五南...は用物の話電お
番一九二五・二三一六西
番〇三六西

四ッ橋

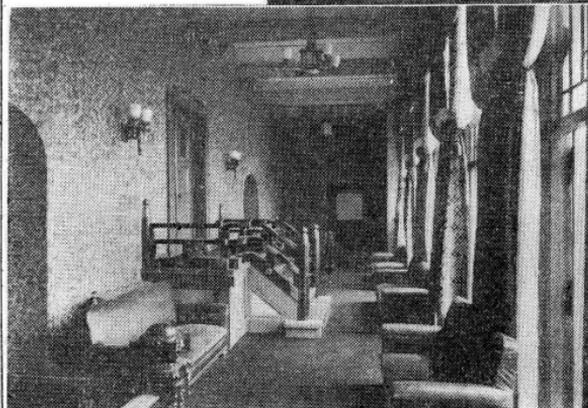
四ツ橋
文樂座
グラフィック



観覧席より舞臺を望む



文樂座外観全景



二階正面休憩所と特別階入口

十月の芝居案内

座名

狂言名題

出勤俳優

道頓堀

浪花座

一日二時十五分 夜
初日二時十五分 夜
日開演二時

【更生新聲劇】

第一 檜山兄弟 三幕十場
マニラの大疑獄
 第二 西鳥事件 二幕
(冤罪の死刑囚)
 第三 風雲播磨灘 四幕

辻野 ○ 小波、原、松江、鬼頭、藤本
 鳥居、深見、進藤、芝田 ○ 中田
 浦波、環、尾崎、廣瀬、東、香椎、柳 ○
 伊井 ○

中

道頓堀

座

一日二時十五分 夜
初日二時十五分 夜
日開演二時

【新國劇一派】

第一 メリケンの銀二 二幕三場
 第二 江戸の虎退治 二幕三場
 第三 無宿人國記 三幕七場

中井、野村、金井、島田、丸茂、畑
 中、秋月、小川、伊藤、雄島、辰巳、高木 ○
 久松、山路、二葉、永島、初瀬

角

道頓堀

座

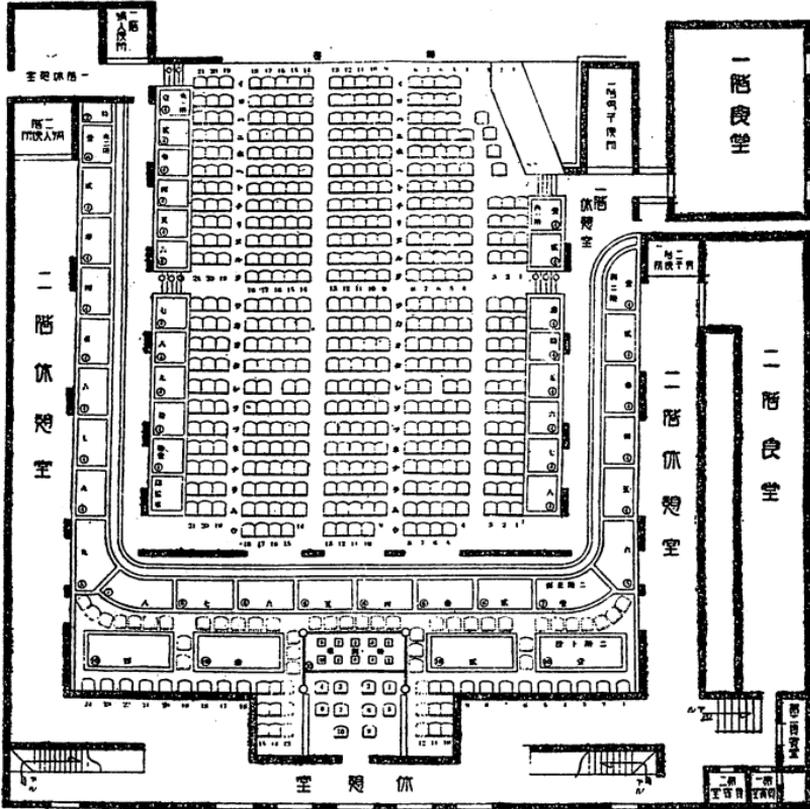
一日二時十五分 夜
初日二時十五分 夜
日開演二時

【淡海劇一派】

① 意気な男 一幕
 ② 瘦せ我慢 一場
 ③ 燃ゆる憶ひ 三場
(随来積組)
 ④ 土手の家 二場
 ⑤ 怖い眼 二幕

淡海 ○ 辨慶、白石、晚鐘、唐橋、
 秋月、浪嶽、紫雪、太郎、樂三、都式部、桂月、かもめ、時次、樂太 ○
 薰、るり子、喜久子、松江、満壽子
 八千代、光子

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前、賣切符、壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御席席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由になります御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

●切符賣場右指定席切符は當日前賣さし正面西側本家入口にて發賣して居ります。

●二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

●尚多人數様お団体様のお申込も御相談いたします。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食のパール。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券

各自に御持ち下さいませし、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座いますから御使用下さい。

御休憩の間は

四ツ楯

文

樂

座

前賣切符専用電話南四七二番

電話南 三七八八番

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)		夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
		平日	80圓	100圓	160圓	
文樂座	約 850人	土曜	80圓	110圓	170圓	
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓	

◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
ゼラチンペーパー		1枚1回 1圓
大 衝 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラヂエータ使用料		無料

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守り下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセズ
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用ヲ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用ヲ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセズ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

は 憩 休 御

へ 所 憩 休 御 の 側 西 階 一

°す ま る 座 御 が 備 設 と 茶 お
の ル オ タ 蒸

用 使 「ソ ヨ シ ー ロ ト ー レ」 は に ル オ タ 蒸

上 召 で 處 此 は 草 煙 御 ち ら か す ま る 座 御 が 臺 煙 喫 も に 下 廊 各

。い さ 下 て

。い さ 下 處 遠 御 は 煙 喫 の 内 場

に 産 土 お

書 葉 繪 摺 手 版 木 樂 文

品 作 の 氏 郎 二 清 藤 齋 る お 評 定 て 就 に 繪 樂 文 て 於 に 會 陽 春

共 裝 包 い し 美 組 一 枚 三 ・ 行 發 月 毎 ・

錢 十 五 金 部 一

の 語 ス ン ラ フ

『 究 研 の 居 芝 形 人 樂 文 』

著 氏 男 網 嶋 宮

錢 十 八 圓 壹 金 部 一

錢 十 三 金 部 一 『 堀 頓 道 』 誌 雜 刊 月

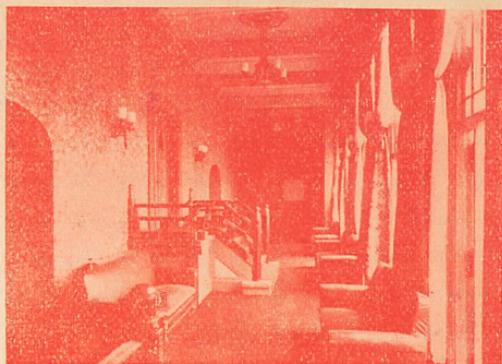
昭和七年九月廿四日印刷
昭和七年十月一日發行

大坂・四ツ橋文樂座
發行人 大塚 真三

編輯 成山 桂三

印刷者 永井太三郎

印刷所 永井日英堂印刷所
大坂市西區土佐堀通一丁目



歡樂の秋 食味の秋

兩者をコンビしたる
最善の饗宴

大坂唯一「文樂座の御宴會」を

御利用下さいまし

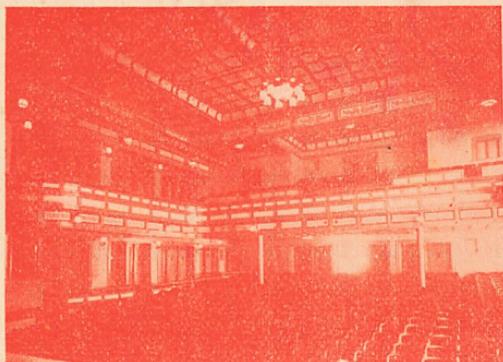
切望竭まなかつ
た名作名配役の
上演シークな構
へ明らかで明る
い感じの食堂

金四圓五十錢也 (御一名様分)

御觀覽は……………一等椅子席
御食事は……………和食・洋食
番附……………役割と床本入
記念寫眞・人形をゐれた特別撮影
(即日お持歸りの出来る標準成致します)

御申込は廿人様以上なるだけ五日前に願います

お電話は南四七壹番番お申附け下さい





美はしの聲
豊かな聲量

は健康から！

眼鏡肝油

*Yoshiko Iwano
Miss Iwano
Dec. 1931*

あなた的美と健康の
爲めに眼鏡肝油を
お奨め致します。

眼鏡肝油製品

眼鏡肝油

二五〇瓦入 瓶入

五〇〇瓦入 瓶入

五〇〇瓦入 罐入

メガネ肝油球

百粒 罇入

三百粒 罇入

全國有名薬店にあり

眼鏡肝油發賣元

伊藤千太郎商會

大阪・道修町